

柳久保遺跡群 III

1986

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

柳久保遺跡群 III

—城南住宅団地内造成地区内第一工事区調査報告—

1986

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋の地は、北には谷川連峰、赤城山の眺望、西側には榛名山の遠望もひらけ利根川の清流が市街地の西に流れをみることができる。

敷島公園の松林、前橋公園の桜、臨江閣のモクレン、広瀬川沿いの緑道に種々の花が咲きほこる詩情豊かな街であり、緑と水と詩の街でもあります。

27.6万人余の県都とし、文教都市の実現を期し、秩序ある都市づくり、調和のとれた産業の振興、福祉社会、急激な社会構造の変化に対応する諸施策の具現化に努めている。

特に、ニューメディアを導入してのテレトビア計画、市民の生涯学習を保障、奨励する施策も着々と進んでいる。

調和の取れた発展の一環として土地基盤整備、工業団地造成、住宅団地造成と開発計画をも推進している。

柳久保遺跡は、赤城山南麓のゆるやかな起伏の富む地に20haに及ぶ住宅団地造成を計画し実施に移行しているのである。

住宅団地造成を3工区に分け年次計画で造成する。それに合わせて発掘調査を実施していくなければならない。

本報告書は、第1工区を調査した報告書である。

本報告書を刊行するにあたり物心両面からの協力をいただいた前橋工業団地造成組合に厚くお礼を申し上げます。

また、本発掘調査に際し、山武考古学研究所の組織をあげての調査をしていただいた研究所長、調査担当者に感謝申し上げます。

夏の暑さ、冬の寒風の中で作業を進めていただいた作業員の方々にもお礼を申し上げます。

本報告書が斯学の発展のため寄与できれば幸いに存じます。

昭和61年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 奈良三郎

例 言

- 1、本書は前橋市荒子・荒口町に所在する城南住宅団地造成予定地における柳久保遺跡群第Ⅰ工区発掘調査報告書である。
- 2、調査は前橋市工業団地造成組合（管理者 清水一郎）の依頼により前橋市教育委員会指導のもと山武考古学研究所が担当した。
- 3、現地調査は山武考古学研究所調査研究員武部喜充、肥田順一、折原洋一、芦田和義が行なった。
- 4、本書の遺物、図面の整理は武部喜充、肥田順一、折原洋一、芦田和義が担当し、富田弘子に協力を得た。
- 5、本書編集は折原洋一が行ない平岡和夫が総括した。
- 6、本書の執筆分担は以下の通りである。

第2章、第5章第4節、第7章第2節 折原洋一

第3章、第5章第1～4節、第6章、第7章第1節 武部喜充

第4章、 肥田順一

- 7、発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の機関、諸氏の御指導、御助言を賜った。記して感謝の意を表す次第であります。

群馬県教育委員会文化財保護課、前橋市教育委員会 前橋市工業団地造成組合、

凡 例

- 1、造構の番号は整理段階の番号である。
- 2、第1図は国土地理院発行5万分の1「前橋」を使用。
- 3、第17図の縄文式土器断面図のスクリーントーンは文章中のⅠ群を示す。
- 4、第39、40図石室分解図のスクリーントーンはすでに設置された石材を示す。

目 次

第1章 調査に至る経緯.....	1
第2章 遺跡の概観.....	2
第1節 位置と環境.....	2
第2節 周辺の遺跡.....	2
第3章 調査の概要.....	5
第1節 調査の方法.....	5
第2節 調査の経過.....	5
第4章 派訪遺跡.....	7
第1節 遺跡の立地.....	7
第2節 調査の経過.....	7
第3節 土層.....	7
第4節 遺構・遺物.....	10
第5章 柳久保遺跡・古墳群.....	15
第1節 遺跡の立地.....	15
第2節 調査の経過.....	15
第3節 土層.....	16
第4節 遺構・遺物.....	18
第6章 柳久保水田址遺跡.....	39
第1節 遺跡の立地.....	39
第2節 調査の経過.....	39
第3節 土層.....	39
第4節 遺構.....	40
第7章 小結.....	41
第1節 土塹・溝.....	41
第2節 古墳.....	41

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	3
第2図 調査区設定図	7
第3図 標準土層図	8
第4図 諏訪遺跡（第1地点）全体図	9
第5図 諏訪遺跡（第2・3地点）全体図	9
第6図 諏訪遺跡（第9地点）全体図	9
第7図 1号土塁	10
第8図 1～3号溝平面図	11
第9図 1～3号溝断面図	12
第10図 4号溝	13
第11図 1号炭窯	13
第12図 調査区内出土遺物	14
第13図 標準土層図	16
第14図 柳久保遺跡（第4・5・7地点）全体図	17
第15図 旧石器試掘グリッド東壁断面図	18
第16図 旧石器・縄文試掘グリッド設定図	19
第17図 縄文包含層内出土遺物（1）	21
第18図 縄文包含層内出土遺物（2）	22
第19図 縄文包含層内出土遺物（3）	23
第20図 1・2号土塁	24
第21図 1・2号炭窯	25
第22図 2号古墳全体図	27
第23図 2号古墳石室	28
第24図 2号古墳石室堀形断面図	29
第25図 2号古墳出土遺物	29
第26図 3号古墳全体図	31
第27図 3号古墳石室	32
第28図 3号古墳堀形	33
第29図 3号古墳掘形断面図	34
第30図 3号古墳出土遺物	34
第31図 4号古墳全体図	35
第32図 4号古墳石室	36

第33図	4号古墳石室断面図	36
第34図	4号古墳掘形	37
第35図	4号古墳出土遺物	38
第36図	調査区内出土遺物	38
第37図	柳久保水田址遺跡（第8地点）全体図	39
第38図	柳久保水田址遺跡（第8地点）北壁断面図	40
第39図	3号古墳石室分解図（1）	42
第40図	3号古墳石室分解図（2）	43

図版目次

図版1-1	調訪遺跡（第1地点）全景	-4	X=83、Y=104グリッド遺物出土状況
-2	1号溝		
図版2-1	2号溝	図版8-1	縄文土器集中区発掘状況
-2	3号溝	-2	旧石器時代・試掘土層断面
図版3-1	1号溝断面	-3	1号土塁・断面
-2	2号溝断面	-4	1号土塁・完掘
-3	3号溝断面	-5	2号土塁・断面
-4	3号溝断面	-6	2号土塁・完掘
-5	1号土塁	図版9-1	1号炭窯
図版4-1	調訪遺跡（第2・3地点）全景	-2	2号炭窯
-2	1号炭窯・炭化材出土状況	-3	縄文時代包含層の発掘風景
-3	1号炭窯・確認状況	-4	尖頭器出土状況
-4	1号炭窯・完掘状況	-5	土器出土状況
図版5-1	調訪遺跡（第9地点）全景	-6	石斧出土状況
-2	調訪遺跡（第9地点）発掘風景	-7	石匙出土状況
-3	調訪遺跡出土遺物	図版10-1	2・3・4号墳の位置
図版6-1	柳久保遺跡（第4地点）全景	-2	2号墳・周溝確認状況
-2	柳久保遺跡（第5地点）全景	図版11-1	2号墳・前庭部の石材散乱状況
図版7-1	柳久保遺跡（第7地点）全景	-2	2号墳・前庭部の石材散乱状況
-2	柳久保遺跡（第7地点）縄文時代	-3	2号墳・前庭部の磨製石器出土状況
-3	包含層調査状況		
-3	X=83、Y=107グリッド遺物出土状況	図版12-1	2号墳・石室
		-2	2号墳・掘り方

図版13- 1	3号古墳・周溝確認状況	- 2	3号墳・掘形全景
- 2	石室内の落石状況	図版18- 1	4号墳・周溝確認状況
- 3	前庭部実測風景	- 2	4号墳・前庭部の石材散乱状況
- 4	石室内の落石状況	図版19- 1	4号墳・前庭部の石材散乱状況
- 5	石室発掘風景	- 2	4号墳・石室
図版14- 1	3号墳・全景	図版20- 1	4号墳・石室石積み1段目
- 2	3号墳・石室閉塞状況	- 2	4号墳・掘形
図版15- 1	3号墳・石室開口状況	図版21	包含層出土遺物
- 2	前庭部の須恵器	図版22	包含層出土遺物
- 3	石室	図版23- 1	古墳出土遺物
- 4	石室	- 2	表探遺物
- 5	石室	図版24- 1	柳久保水田址遺跡（第6地点）全景
図版16- 1	石室・石積み3段目	- 2	柳久保水田址地点全景（第8地点）全景
- 2	石室・石積み1段目		
図版17- 1	淡門と玄門と奥壁の立石状況		

表 目 次

表1、遺跡地名表.....	3
表2、調査工程表.....	6

第1章 調査に至る経緯

昭和57年12月に前橋市工業団地造成組合（管理者）より、城南住宅団地造成予定地内における埋蔵文化財の有無の調査の依頼が教育委員会にあった。そこで教育委員会は、昭和58年1月末日城南住宅団地予定地内の遺物分布状況を調査した。その結果、台地上のはば五ヶ所に良好な遺物包蔵地、谷地に埋没水田跡が推定された。さらに遺跡の範囲調査内容を把握するために試掘調査を実施することになった。

試掘調査は、市教育委員会の指導のもとに民間発掘調査機関である山武考古学研究所により、昭和59年10月から翌60年2月にかけて実施した。その結果、遺構・遺物の分布の集中する範囲とその内容が把握されるに至った。この調査結果に基づき、60年度の計画が立案された。60年度の調査は、第1工区を山武考古学研究所が第2工区を市教育委員会が実施することとなった。第1工区の調査は4月より着手され10月に終了した。

調査組織

團長	奈良 三郎	(前橋市教育委員会 教育次長)
調査指導	平岡 和夫	(山武考古学研究所 所長)
	大和久震平	(山武考古学研究所 調査研究室長)
	福田 紀雄	(前橋市教育委員会 社会教育課係長)
調査担当者	折原 洋一	(山武考古学研究所 調査研究員)
	武部 喜充	(山武考古学研究所 調査研究員)
	肥田 順一	(山武考古学研究所 調査研究員)
	芦田 和義	(山武考古学研究所 調査研究員)

参加者

青木一郎 青木芳子 天笠重子 新井ヒロ子 安藤綱代 石井百々子 石間こずえ 石間とく子
飯島キク枝 飯島奈美知 飯島美枝 梅沢八重子 大沢一江 大沢スミ 大沢光子 大林正子
折原澄子 勝田きみ江 神山初子 神沢カヤ子 鹿沼勝江 鹿沼さとる 鹿沼周次郎 鹿沼節子
鹿沼仁衛 木島みつ 小沼千恵 小屋キミ江 小屋とよ子 小屋はるこ 坂牧光江 霜田まつ子
新保永二 新保勝太郎 新保隆 新保富恵 新保昌子 新保まつ 新保松乃 新保幸永 須藤力
津え 須藤寅次郎 須藤なを子 須藤理恵野 菅原悦子 関根あさ 瀬下テル子 竹生恵美子
高坂かく 高坂とよ子 高坂花子 高坂やす 高坂やすの 田中光子 烏山初子 新闇千恵子
根本時子 羽鳥ふみ子 林静枝 平岡龍子 平山史子 深町みね子 深町みゆ子 堀越うめ子
山田由美子 横沢信子 吉田さだ子 富田弘子 掘越豊

第2章 遺跡の概観

第1節 位置と環境（第1図）

本遺跡群は赤城山南麓の荒子町、荒口町に位置する。周辺は荒砥川、宮川、神沢川等の多くの中小河川が存在し、樹枝状の開析谷が発達しており複雑な地形となっている。本遺跡群はこれら河川の内、宮川の中流に存在し、遺跡群の中央部を南北に流れている。

60年度調査を実施した第1工区は宮川の左岸に立地し、その東部に宮川の支谷が形成されている。この支谷には深掘りと呼ばれる用水が存在し、この深掘の西岸に諏訪遺跡が、東岸に柳久保遺跡・古墳群が支谷に柳久保水田址がそれぞれ存在する。

第2節 周辺の遺跡（第1図）

本遺跡周辺には極めて多くの遺跡が確認されている。特に本遺跡よりも南方に多く、北方は少ないようである。これは発掘調査数の差が反映しているにすぎず、今後、本遺跡の北方にも多数の遺跡が確認されるようになると思われる。これまで発掘の行われた遺跡をみると、先土器時代から近世に至るまでの多種多様な状況を示している。そこで時代別に本地域を概観してみる。

先土器時代は、本地域において発掘調査の行われた遺跡は極めて少なく、北三木堂遺跡等が知られるにすぎない。

縄文時代は前期、中期の遺跡が少數ながらも調査されている。前期の遺跡は諸磯期の場合が多く、荒砥二之堰、荒砥宮田遺跡等で住居址が検出されている。これらの集落は、いずれも小規模な例が多い。中期の遺跡は荒砥二之堰、荒砥北原、泉沢谷津遺跡等が知られるが、いずれも小規模である。

弥生時代は、縄文時代同様に小規模な遺跡が点在するにすぎない。荒砥前原遺跡等が知られる。

古墳時代は前期より急激に遺跡数が増加し、集落址の他に荒砥島原、荒砥諏訪、堤東遺跡等で方形周溝墓群が検出されており、特に堤東遺跡では前方後方形周溝墓が存在する。後期になるとさらに遺跡は増加し、県下でも有数の古墳密集地域となる。このような状況の中で、本遺跡近接地域は古墳の分布が相対的に少なく、特異な地域と言える。

奈良・平安時代になると、本遺跡近隣にも多数の遺跡が出現し、各遺跡ともに極めて近接した距離に存在する。また、本遺跡群の東北へ200m程度の荒砥西原遺跡では瓦を伴う建築址が検出されており、大いに発展したことが想定される。



第1図 周辺の遺跡

表1、遺跡地名表（第1図）

No	遺跡名	概要
1	柳久保遺跡群	本遺跡
2	荒子小学校遺跡	奈良時代住居址
3	大久保遺跡	奈良・平安時代住居址
4	頭無遺跡	弥生～平安時代住居址
5	川籠皆戸遺跡	奈良・平安時代住居址 方形周溝墓

No	遺跡名	概要
6	堤東遺跡	平安時代住居址 方形・前方後方形周溝墓
7	荒砥西原遺跡	奈良・平安時代住居址
8	泉沢谷津遺跡	縄文・古墳時代住居址 古墳
9	大胡5・6号墳	円墳 壓穴石室3基

No	遺跡名	概要	No	遺跡名	概要
10	大塚古墳	前方後円墳	31	伊勢山古墳群	円墳 前方後円墳
11	荒砥347号墳	前方後円墳	32	鶴谷遺跡	弥生～平安時代住居址
12	富田遺跡群	弥生時代住居址 円墳	33	大室城	城跡
13	おとうか山古墳	径29mの円墳	34	新屋遺跡	古墳時代住居址
14	荒砥諏訪遺跡	平安時代溝	35	荒砥上之坊遺跡	縄文～平安時代住居址
15	荒砥諏訪西遺跡	古墳時代住居址 水田址	36	つくば山古墳	方墳
16	荒砥諏訪遺跡	方形周溝墓	37	塔心礎址	布目瓦
17	荒砥宮田遺跡	縄文・古墳～平安時代住居址 水田址	38	大稲荷古墳群	群集墳
18	椎現山古墳	前方後円墳	39	荒砥宮西遺跡	古墳～平安時代住居址
19	荒砥前田遺跡	水田址	40	荒砥洗機遺跡	古墳～平安時代住居址
20	荒口前原遺跡	弥生・平安時代住居址	41	今井神社古墳	前方後円墳
21	阿久山古墳群	群集墳	42	今井城	城跡
22	大道古墳	石製藏骨器	43	宮川遺跡	古墳～平安時代住居址
23	荒砥大日塚遺跡群	奈良～平安時代住居址 水田址	44	荒砥天之宮遺跡	古墳～平安時代住居址
24	荒砥中屋敷遺跡Ⅰ・Ⅱ	古墳時代住居址	45	青柳遺跡	奈良・平安時代住居址
25	荒砥下押切遺跡	古墳時代～平安時代住居址 古墳	46	宮原遺跡	古墳時代住居址 古墳
26	舞台西遺跡	井戸	47	荒砥鳥原遺跡	弥生～平安時代住居址
27	荒砥荒子遺跡	古墳時代館 古墳～平安時代住居址	48	荒砥291号墳	周辺に群集墳
28	丸山古墳群	群集墳	49	ツボロ古墳	円墳
29	荒子北原遺跡	縄文時代住居址 方形周溝墓	50	二之塙遺跡	古墳群 住居址
30	荒砥三木堂遺跡	旧石器、縄文・古墳～平安時代住居址	51	二本松遺跡	古墳～平安時代住居址
			52	片田山古墳群	群集墳
			53	多田山古墳群	群集墳
			54	茶臼山古墳	5世紀古墳
			55	梅ノ木遺跡	古墳時代館 住居址
			56	前二子古墳	前方後円墳
			57	中二子古墳	前方後円墳
			58	後二子古墳	前方後円墳

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

今回の本調査は柳久保遺跡、諏訪遺跡、柳久保水田遺跡の3遺跡に及び、調査面積は19,660m²である。前回（昭和59年10月～昭和60年2月）に行なわれた確認調査の結果に基づいて、上述の3遺跡を更に9地点に分け、グリッド法による部分拡張発掘と全面発掘を実施した。

柳久保遺跡 (第4・5・7地点)

諏訪遺跡 (第1・2・3・9地点)

柳久保水田遺跡 (第6・8地点)

○部分拡張発掘

第1地点 (3,300m²) 第6地点 (140m²)

第2地点 (2,000m²) 第8地点 (6.40m²)

第3地点 (4,000m²) 第9地点 (3.00m²)

第4地点 (500m²)

○全面発掘

第5地点 (8,500m²) 第7地点 (2.80m²)

調査グリッドは、確認調査の場合と同じく、公共座標を基準にして設定した。グリッドは20×20mの大グリッドを設定し、更にその中を4×4mの小グリッドに分割した。また、柳久保遺跡で実施した縄文時代の遺物包層調査は小グリッド単位で行なった。各グリッドの呼称は小グリッド単位で北西隅を基点とし、経線をアルファベット、緯線をアラビア数字で用いた。

第2節 調査の経過

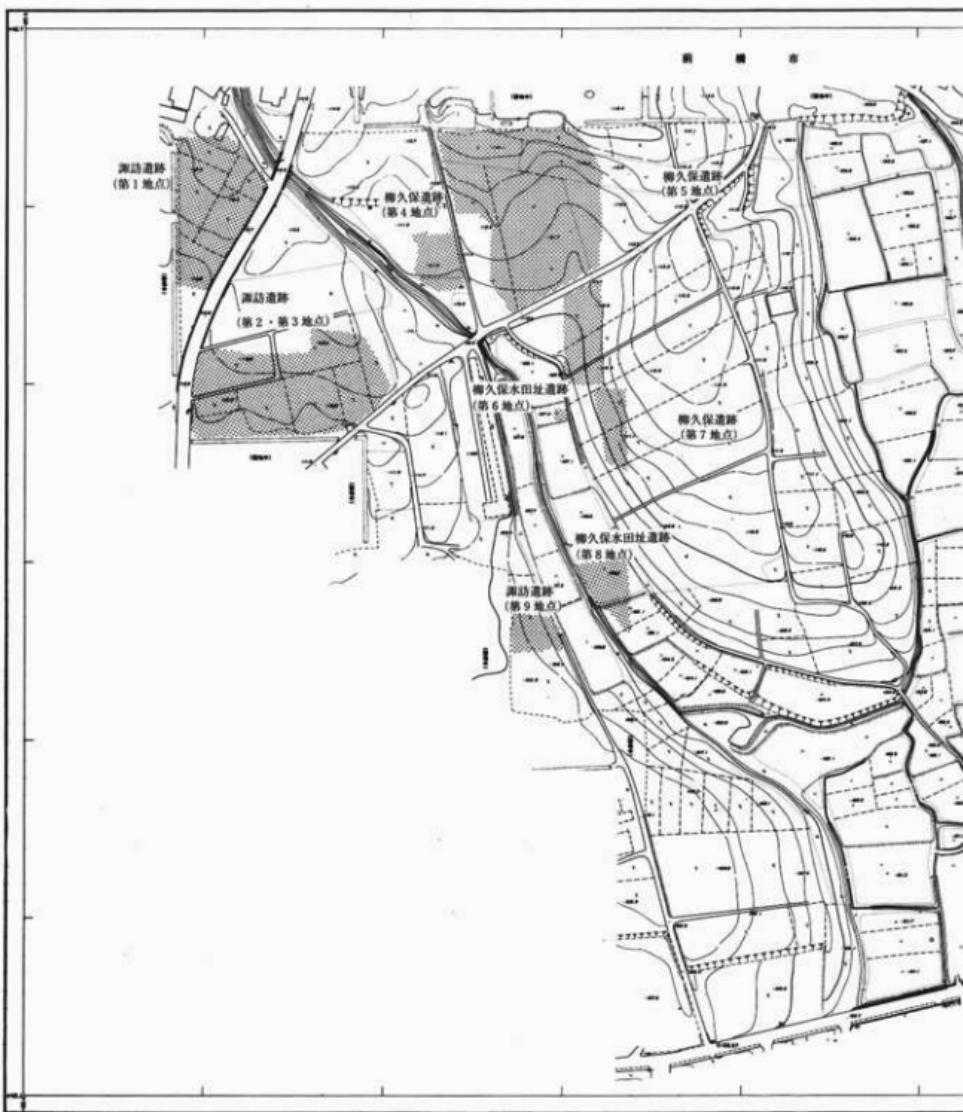
柳久保遺跡群第1工区の調査は昭和60年4月17日から昭和60年10月15日までの182日間にわたって実施された。4月は作業員を入れず、柳久保遺跡（第7地点）、柳久保水田址（第6地点）、柳久保遺跡（第4地点）、柳久保遺跡（第5地点）の表土剥ぎを行なった。5月に入り、第5地点の表土剥ぎを継続するとともに、作業員を使っての調査を開始し、第7地点、第6地点、第4地点、第5地点の造構確認、掘り下げを行ない、第6地点、第4地点の全調査を終了した。6月には、先月に引き続き第5地点の造構確認、掘り下げが行なわれ、柳久保古墳群の3基の古墳の調査が開始された。下旬より諏訪遺跡（第1地点）の表土剥ぎが並行して行なわれたが、梅雨に入り調査の進度が遅くなった。7月は諏訪遺跡（第1地点、第2地点）、諏訪遺跡（第3地点）、柳久保水田址（第8地点）、諏訪遺跡（第9地点）の造構確認、掘り下げ及び、第7地点の縄文

包含層の調査を残すだけとなった。10月15日まで第5地点の調査を行ない、第1工区発掘調査の全工程を終了した。

表2 調査工程表

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
調 訪 遺 跡	第1地点			■	■		
	第2地点			■	■		
	第3地点			■	■		
	第9地点			■	■		
柳 久 保 遺 跡	第4地点		■				
	第5地点		■	■			
	第7地点		■		■		
柳 久 保 水 田 址 遺 跡	第6地点		■				
	第8地点				■		





第2図 調査区設定図

1:10000

第4章 諏訪遺跡

第1節 遺跡の立地

本遺跡は荒砥川の左岸、赤城山麓から南へ延びる台地上に位置し、所在地は前橋市荒口町諏訪である。本遺跡の東方には深堀、柳久保水田址を狭んで柳久保遺跡・古墳群が存在する台地があり、西方の荒砥川左岸の自然堤防上には諏訪西遺跡が存在する。また同一台地上の南側には下鶴谷遺跡が存在する。

第2節 調査の経過

本遺跡は第1地点、第2地点、第3地点、第9地点の4地点に分けて調査された。第1地点は、昭和60年6月21日から表土剥ぎを開始し、7月1日から遺構確認を並行して行なった結果、3条の溝が確認された。溝の掘り下げは7月10日から7月19日まで行なわれ、3号溝によって切られた土塹が確認されたため、8月16日から8月20日まで土塹の掘り下げを行なった。第2地点と第3地点は隣接しているので、昭和60年7月8日から同時に表土剥ぎを開始し、7月18日から7月24日まで一時中断したが、8月3日に表土剥ぎを終了した。表土剥ぎ中断の間に遺構確認、掘り下げを行なったが攪乱が多く、第2地点で炭窯1基を検出したにとどまった。また7月30日から8月3日まで遺構確認を行なったが遺構を確認できなかった。

第9地点は昭和60年7月24日に表土剥ぎを行い、7月25日から7月29日までの遺構確認作業により、1条の溝が西側の調査区域外まで延びていることが確認された。そのため、調査区を拡張し8月1日に表土剥ぎを行なった。8月3日より再び遺構確認を行ない、8月6日・7日に溝の掘り下げを行なった。

第3節 土層（第3図）

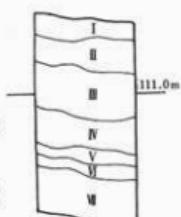
標準土層第Ⅰ層 暗褐色土。粘性、しまりともに悪い耕作土。

標準土層第Ⅱ層 黒色土。径3~5mmの二ツ岳系の軽石を多量に含む。

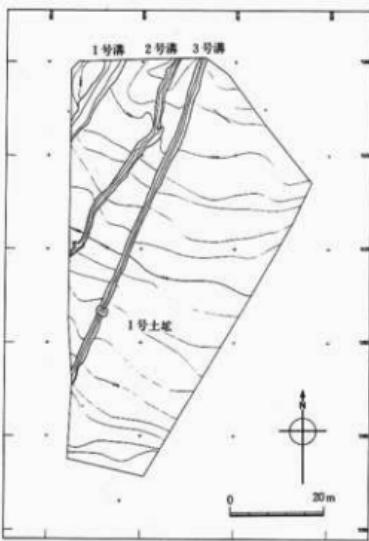
粘性は悪く、しまりは良好である。古墳時代以後の遺物包含層である。

標準土層第Ⅲ層 褐色土。斑状に暗褐色土が認められ、少量のローム粒ローム塊を含む。粘性、しまりともにやや良好である。

縄文時代遺物包含層である。

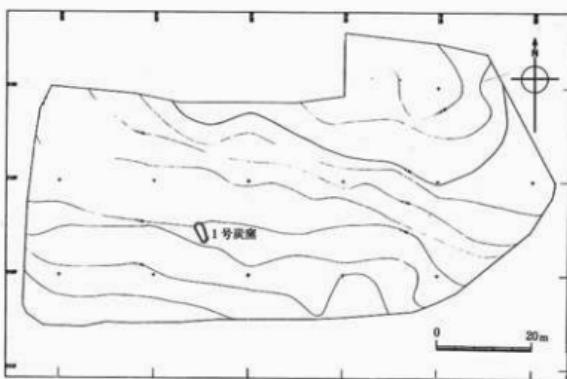


第3図 標準土層図

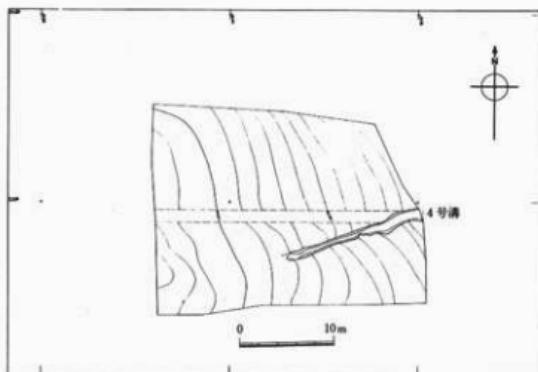


第4図 諏訪遺跡（第1地点）全体図

- 標準土層第IV層 ローム層である。褐色を呈し、粘性悪く、しまりは良好である。径1mm以下の白色粒を多く含む。
- 標準土層第V層 ローム層である。黄褐色を呈する。BPをブロック状に含む。粘性悪く、しまりは良好である。
- 標準土層第VI層 ローム層である。黄褐色を呈する。若干、BPの混入が認められる。粘性やや良好、しまりは良好。
- 標準土層第VII層 ローム層である。暗褐色を呈する。黒色スコリア、白色粒を少量含む。粘性良好、しまり悪い。



第5図 漢訪遺跡（第2・3地点）全体図



第6図 漢訪遺跡（第9地点）全体図

第4節 遺構・遺物

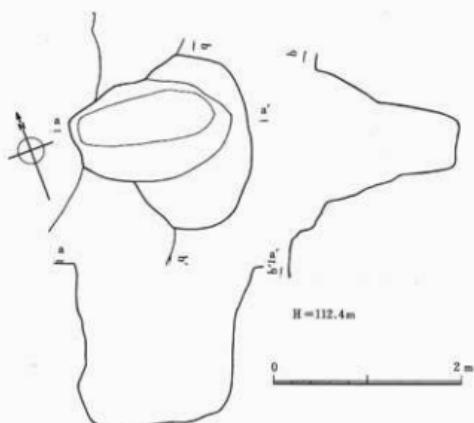
調査遺跡は第1～3地点、第9地点の4地点が存在する。第3地点は遺構を検出できなかった。本遺跡では第1地点より土塙1基、溝3条、第2地点より炭窯1基、第9地点より溝1条が検出されている。遺物は極めて少なく縄文土器片、石器が出土した。

1号土塙（第7図、図版3-5）

1号土塙は第1地点の西部、X=23、Y=79にあり、北西側の半分を3号溝と擾乱によって切られている。断面形は中位に段を有する箱形で、底面はほぼ平坦で3号溝の底部より、約1m深く、標高110.87m、深さ178mである。遺物は出土しなかった。

1号溝（第8・9図、図版1-2）

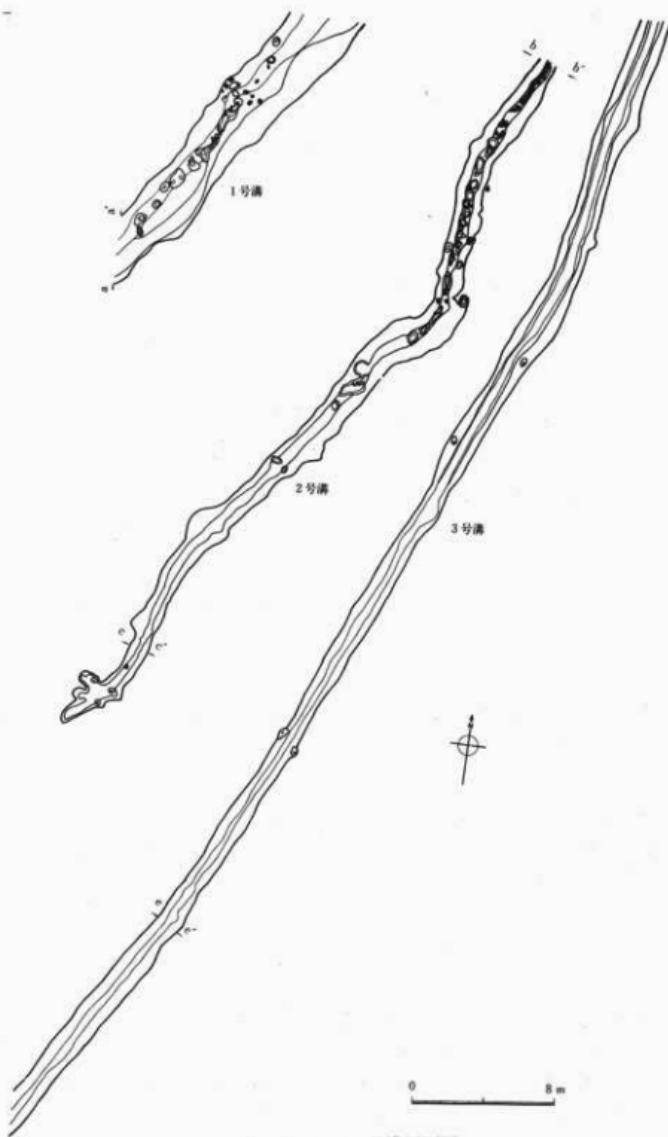
本溝は、第1地点にあり、2号溝、3号溝の西側を北東から南西方向へ延びている。溝の北東端付近では上幅385cmで、底部の標高は113.05mである。また、溝の南西端付近では底部の標高112.67mで、南西に傾斜している。底部には、水の浸食によるものと思われる凹凸が多数存在する。1号溝は1a号溝と1b号溝によって形成され、1a号溝が1b号溝を切っている。両溝はともにローム層に掘り込まれ、覆土はいずれも5層から成り、1a号溝の上層を浅間B軽石が覆っていた。出土遺物は最下層の黄褐色土（ ϕ 1～3mm大の軽石、砂、小石をラミナ状に10～15%含む。）の中から極度に磨滅した土師器の小片が出土した。その他、1a号溝から縄文時代の石鎌、1b号溝床面から磨滅した土師器片が出土している。



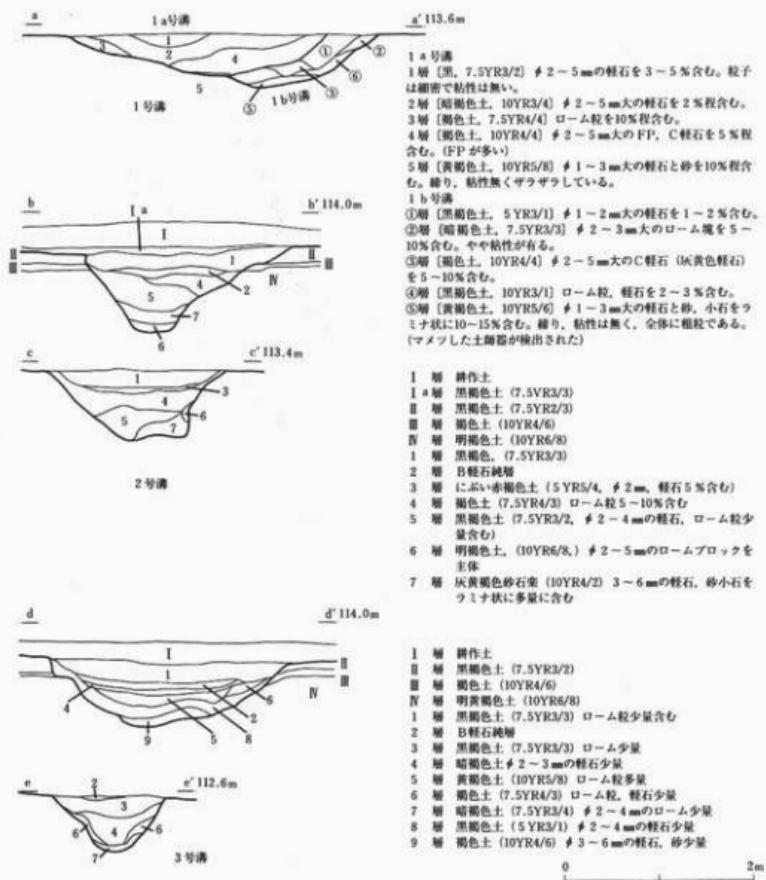
第7図 1号土塙

2号溝（第8・9図、図版2-1、3-2）

本溝は、第1地点にあり、1号溝と3号溝の間を緩やかに蛇行しながら南西方向へ延びている。北東部分はかつて宅地であったため、擾乱を受けていた。断面形は逆台形を呈し、北東端付近で上幅95cm、底面の標高113.00m、東へ蛇行する中央付



第8図 1～3号溝平面図



第9図 1~3号溝断面図

近で上幅2.45cm、底面の標高112.90m、南西端付近で上幅75cm底面の標高112.66mである。底部は激しい水の浸食を受けて無数の凹凸があった。溝はローム層に掘り込まれ、覆土は6層から成る。上層は浅間B軽石が覆っていた。遺物は最下層の灰黃褐色砂岩層 (\neq 3~6mmの大の軽石と砂、小石をラミナ状に多量に含む。) とその上の暗褐色土層 (\neq 2~5mmの大の軽石、小石、砂をラミナ状に含む。) から極度に磨滅した土器器の小片が出土した。

3号溝（第8・9図、図版2-2、3-3・4）

本溝は第1地点にあり、2号溝と3号溝の東側を北東から南西方向へ直線的に延びている。溝は薬研堀を呈した掘形で、1号溝、2号溝とは形態が異なっている。溝の北東端付近で上幅165cm、底面の幅25cm、底面の標高112.83m、南西端付近で上幅150cm、底面40cm、標高111.80mである。溝はローム層に掘り込まれ、覆土は7層から成り、上層を浅間B軽石の純層が覆っている。遺物は覆土中より須恵器の小片1点が出土した。

4号溝（第10図、図版5-1）

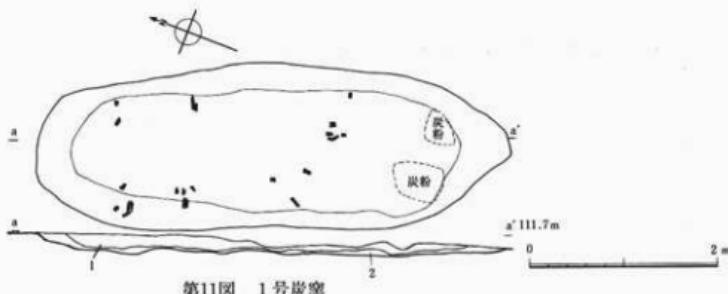
本溝は台地東端の第9地点にあり、西から東へ延びている。全長は14.8mで、東側は柳久保水田址に向って急激に落ち込む谷によって切られ、西側はしだいに浅くなつて消滅する。溝の西端付近で上幅100cm、底面の標高108.73m、東端付近で上幅130cm、標高107.87mである。溝はローム層に掘り込まれ、紫色火山灰層と浅間B軽石を覆土としている。



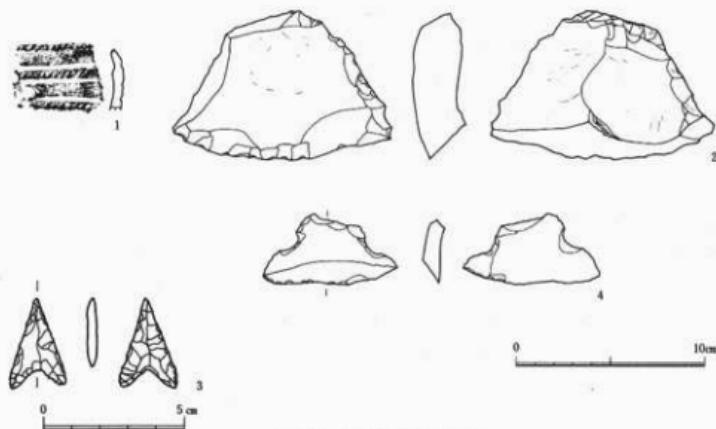
第10図 4号溝

1号炭窯（第21図、図版4-2・3・4）

1号炭窯は第2地点のX=32、Y=102付近に存在する。平面形は椭円形を呈し、長径502cm短径176cm、深さは確認面より20cmで、標高111.45mである。ローム層に掘り込まれ、覆土は2層から成り、上層を浅間B軽石が薄く覆っていた。また、覆土中より2~4cm、長さ3~10cm大の炭火材が多数検出された。



第11図 1号炭窯



第12図 調査区内出土遺物

遺物

1、口縁やや内曲。口唇内側に刻目。器面に平行する沈線と円形刺突文、磨消繩文が見られる。器形は小形の深鉢を呈するものと思われる。後期堀之内Ⅱ式、焼成良く、薄手、胎土中に小石・雲母含有。第1地点、1号溝内出土土器。

2、粗製の大形品。片面加工による刃部の作り出し。調整は雑である。刃部の裏側に自然面を残す。第2地点、X=61、Y=71

3、凹基無茎鐵。長さ3.1cm、幅2cm、断面は平坦。長さのある大形品。第1地点 1 a 号溝出土。

4、横形石匙。基部欠損。片面に自然面を残す。刃部の作り出しが雑である。第1地点、表探。

第5章 柳久保遺跡

第1節 遺跡の立地

本遺跡は荒砥川の左岸、赤城山麓から南へ延びる台地上に位置し、所在地は前橋市荒口町柳久保である。本遺跡の西側には柳久保水田址を狭んで、諏訪遺跡が存在する台地となる。標高は113.0mから111.0mで緩やかに北から南へ傾斜する。柳久保水田址のある開析谷との比高は約3mである。

第2節 調査の経過

本遺跡は、第4地点、第5地点、第7地点の3地点に分けて調査された。

第4地点は昭和60年4月27日から表土剥ぎを開始し、5月13日から遺構確認を行なった結果、遺構とみられた落ち込みは風倒木痕であることが判明した。5月15日遺跡全景を撮影して調査を終了した。結局、第4地点からは遺構が検出されなかった。

第5遺跡は昭和60年4月20日から表土剥ぎを開始し、5月16日から遺構の確認を行なった結果3基の円墳と2基の炭窯が確認された。円墳のうち1基は前回の確認調査で既に確認されていたもので、今回、新たに確認された円墳は確認調査時に浅間B軽石純層を覆土上層に有する竪穴住居址の落ち込みとして確認されていた。これら円墳は昭和58年度に、県教育委員会が調査した柳久保古墳群に属するものであるため、古墳番号も継続して、2・3・4号墳とそれぞれ呼称した。

3号墳は6月6日から調査を開始し、まず、前庭部に落とされている天井石などの実測・写真撮影を行なった。石室内の土は丁寧に篠にかけたが遺物は出土しなかった。側壁の石は段階別にばらして実測・写真撮影を行なった。最後に裏込めと掘り方の調査を行なって終了した。

2号墳と4号墳は6月15日から調査を開始した。2号墳の北側半分は、既に県教育委員会で調査されている。また、4号墳も当初、1号墳の南側にあたると見られていたが、位置的に違うことから、新たに4号墳として調査を行なった。2・4号墳とも3号墳同様に前庭部に天井石などが散乱していた。2号墳の前庭部で破碎された土師器壺と弥生時代後期のものと思われる磨製石鎌が出土した。どちらも石室内の土は丁寧に篠にかけたが遺物は出土しなかった。最後に裏込めと掘り方の調査を行なって、9月13日に終了した。

炭窯2基の調査は6月20日から開始し、1週間で終了した。両方とも覆土上層に浅間B軽石純層を有するものである。

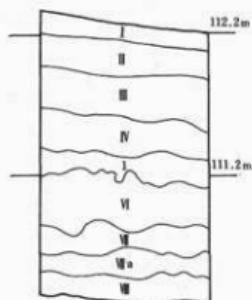
繩文時代包含層の調査は8月7日から開始した。4×4mの小グリッドを単位として、包含層であるⅢ層まで掘り下げていった。調査区域の北東側にⅢ層中から掘り込まれている土塙を2基

検出した。また、北側では広い範囲で縄文時代前期の土器片が集中しているのが確認された。この土器片集中区の土層断面を細かく観察したりしたが、住居址らしい落ち込みは検出できなかつた。包含層の調査は、包含層グリッド配置図を作成して9月13日に終了した。

旧石器時代の調査は8月26日から9月13日に終了した。前回の確認調査で旧石器時代の遺物が検出された地点を拡張する方法をとつて調査は進められたが、遺物は検出されなかつた。

第7遺跡の表土剥ぎは昭和60年4月17日から3日間を要した。排土場所が狭いために困難を極めた。5月8日から15日まで落ち込みを掘り下げて調査を行なつたが、いずれもビニールが覆土内から出土したりして現代の擾乱であることが判明した。6月17日から同月29日まで、調査区域内に4×4mの小グリッドを7箇所設定して縄文時代包含層の調査を行なつた。その結果、2箇所のグリッドから縄文時代前期の土器片と石器が出土した。各グリッドの土層断面と、遺物出土の平面的位置と水平的位置を実測し、最後に、包含層グリッド配置図を作成して終了した。

第3節 土 層



第13図 標準土層図

第3節 土 層

標準土層第I層 暗褐色土。粘性、しまりともに悪い耕作土。

標準土層第II層 黒色土。径3~5mmの二ツ岳系の軽石を多量に含む。粘性は悪く、しまりは良好である。古墳時代以後の遺物包含層である。

標準土層第III層 褐色土。斑状に暗褐色土が認められ、少量のローム塊を含む。粘性、しまりともにやや良好である。縄文時代遺物包含層である。

1層、褐色土。黄色軽石(Φ1~10mm)をやや多く含む。粘性悪く、しまりは良好である。

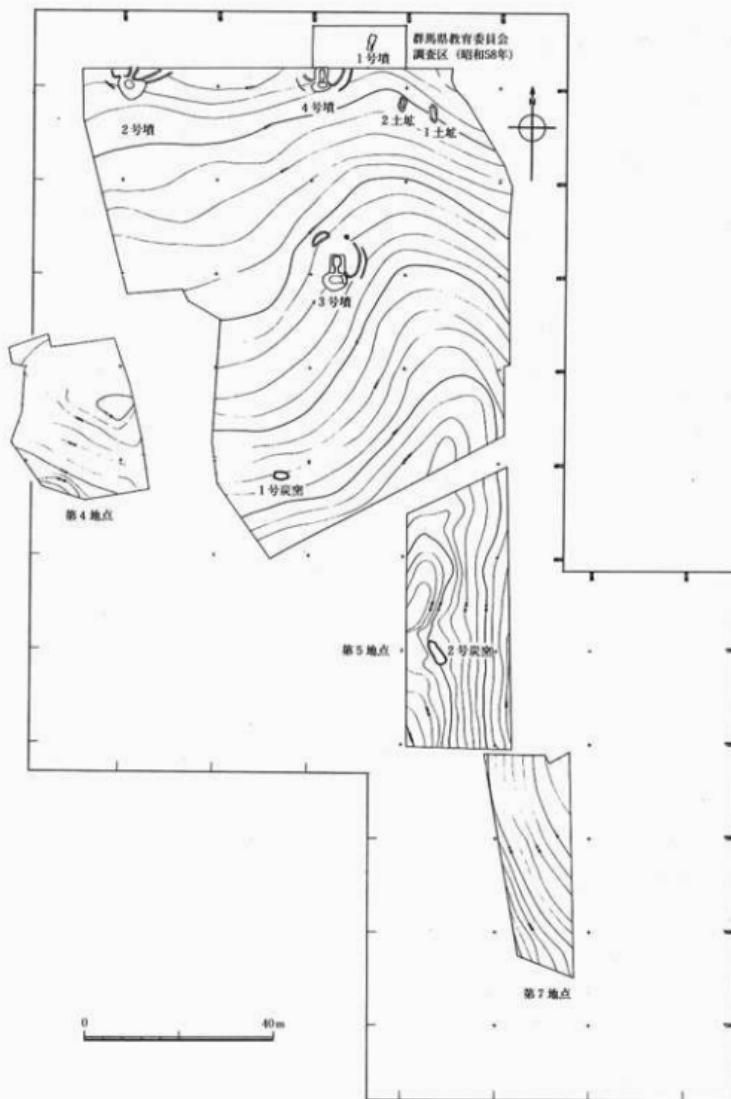
標準土層第V層 ローム層である。黄褐色を呈する。B Pをブロック状に含む。粘性悪く、しまりは良好である。

標準土層第VI層 ローム層である。黄褐色を呈する。若干、BPの混入が認められる。粘性や良好、しまりは良好。

標準土層第VII層 ローム層である。暗褐色を呈する。黒色スコリア、白色粒を少量含む。粘性良好。しまり悪い。

標準土層第VIIa層 ローム層である。第VI層より若干明るい暗褐色を呈する。黒色及び赤色のスコリアを含む。粘性良好、しまり良好である。

標準土層第VIII層 ローム層である。第VII層に色調、含有物は類似するが、粘性がやや悪く、しまりが大変良好となる。



第14図 柳久保遺跡（第4・5・7地点）全体図

第4節 遺構・遺物

本遺跡は第4・5・7地点よりなり、この内第4・7地点においては遺構の検出を見なかった。第5地点では古墳3基、平安時代の炭窯2基、縄文時代の土塙2基が検出された。この他に縄文時代の遺物の集中分布が見られた。

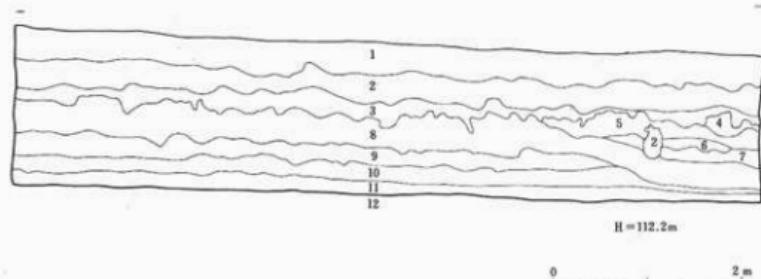
縄文包含層の出土遺物（第16図、図版9-3・4・5・6・7）

前回の確認調査によって、旧石器時代の遺物と縄文時代の遺物包含層が確認された。今回は、その結果に基づいて調査グリッドを設定して行なった。

旧石器時代の調査は、前回遺物が検出された地点を中心に $10 \times 10\text{m}$ の範囲で標準土層第Ⅳ層まで掘り下げて行なわれた。しかし、遺物は検出されなかつた。

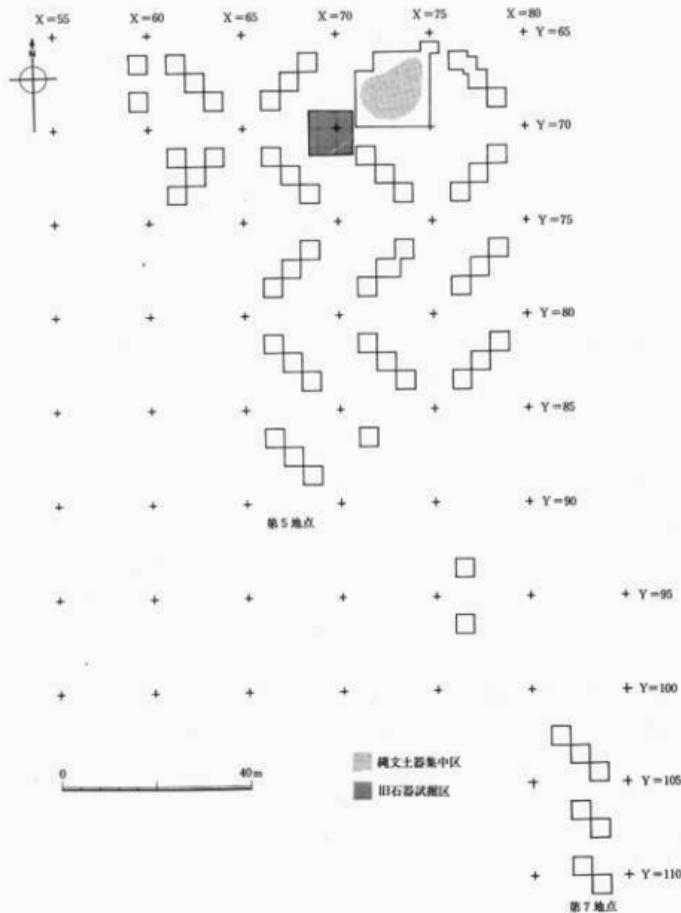
縄文時代の遺物包含層の調査は、全調査面積の約8% (1120m^2) の試掘率で $4 \times 4\text{m}$ の小グリッド単位で行なわれた。

その結果、調査区域北側のX=71~75、Y=66~70の範囲で縄文時代前期の土器集中区が検出され、他にも調査区全域にわたって土器や石器が検出された。



1. 標準土層第Ⅲ層
2. 黒褐色10YRR2/2, 軽石 (diameter 1-3mm) 多, 粘性悪く, 繰り良,
3. 黒褐色10YRR2/2, 7層ブロック (1-10mm) を多く含む, ベースは2層の粘性悪く, 繰り良,
4. 黄褐色10YR6/4, 黄色軽石 (diameter 1-10mm) をやや多く含む, 粘性悪く, 繰り良,
5. 明黄褐色10YR6/6, 黄色軽石 (diameter 2-5mm) を多く含む, 粘性悪く, 繰り良,
6. 黄褐色10YR7/8, 黄色軽石 (diameter 2-1mm) を多く含む, 粘性悪くともにやや良,
7. 淡白10YRR8/2, 上部に厚さ0.5mmの酸化鉄層あり, 粘性良好, 繰りや悪い,
8. 標準土層第Ⅴ層
9. 標準土層第Ⅳ層
10. 標準土層第Ⅲ層
11. 標準土層第Ⅱ層
12. 標準土層第Ⅰ層

第15図 旧石器試掘グリッド東壁断面図



第16図 旧石器・縄文試掘グリッド設定図

縄文土器（第17・18図、図版21・22）

遺物集中区から出土した縄文土器はいずれも前期に相当するものである。これらの土器は大部分は斜縄文が施されているが、胎土に纖維を含むI群と胎土に纖維を含まず、雲母を含むII群とに分けられる。

I群

胎土中に纖維を含有する一群である。いづれも器壁が粗雑で焼成は良くない。前期の黒浜期に相当するものと思われる。1と5・6・7・8・9は同一個体か。

1は口縁部に無文帯をもつ。器面に横位の調整のための擦痕が見られる。口縁はやや外反。口唇は若干丸味をもつ。胴部は該期特有の張り出し部をもつものであるが若干張り出し方が弱い。胴部の地文には粗い単節LR斜縄文が施文される。5～9は同じ縄である。2～4は口縁部だが2はやや内削りであるのに対し、3・4は平坦である。いづれも直立して立ちあがる。2・3は、無文帯を構成するが4は粗い単節LR斜縄文が施文される。いづれも1とは別個体である。10・11・12・13・14・15・16は無文部の破片であるが、10の一部で粗い縄文が見られ、1と同一である可能性があるほかは別個体と思われる。

II群

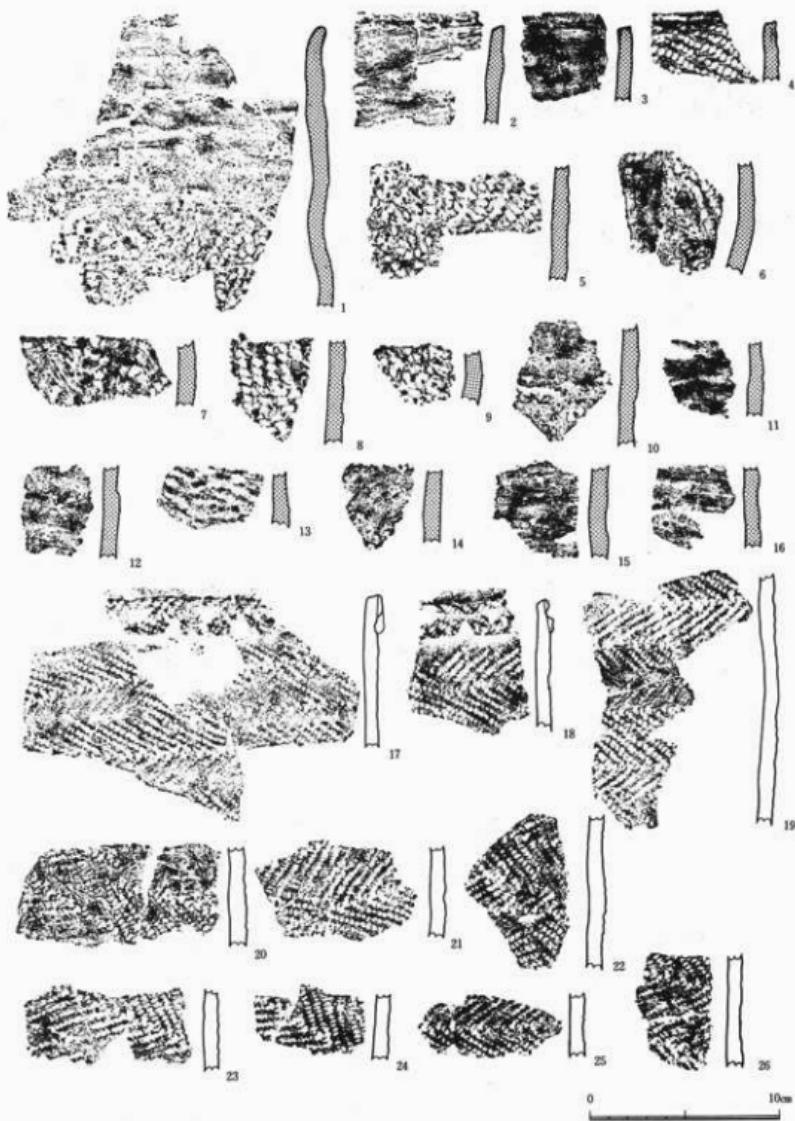
前期終末の十三菩提式。破片はすべて同じであり胎土は小石・砂粒・雲母を含み、焼成は良好。色調は褐色を呈し、同時期の所産（同一個体の可能性あり）。

一般に南関東で見られる細い粘土紐の貼付・半截竹管状工具による平行沈線文は施文されない。口縁に三角形の印刻文が交互に施文され、口縁上部に文構帶が構成される。地文に縄文をもち、胎土中に金雲母を含有する。器壁は薄く、南関東のものとは若干異なる。北陸地方の鍋屋町式との類縁性も考えられるが、本地域の特徴か。

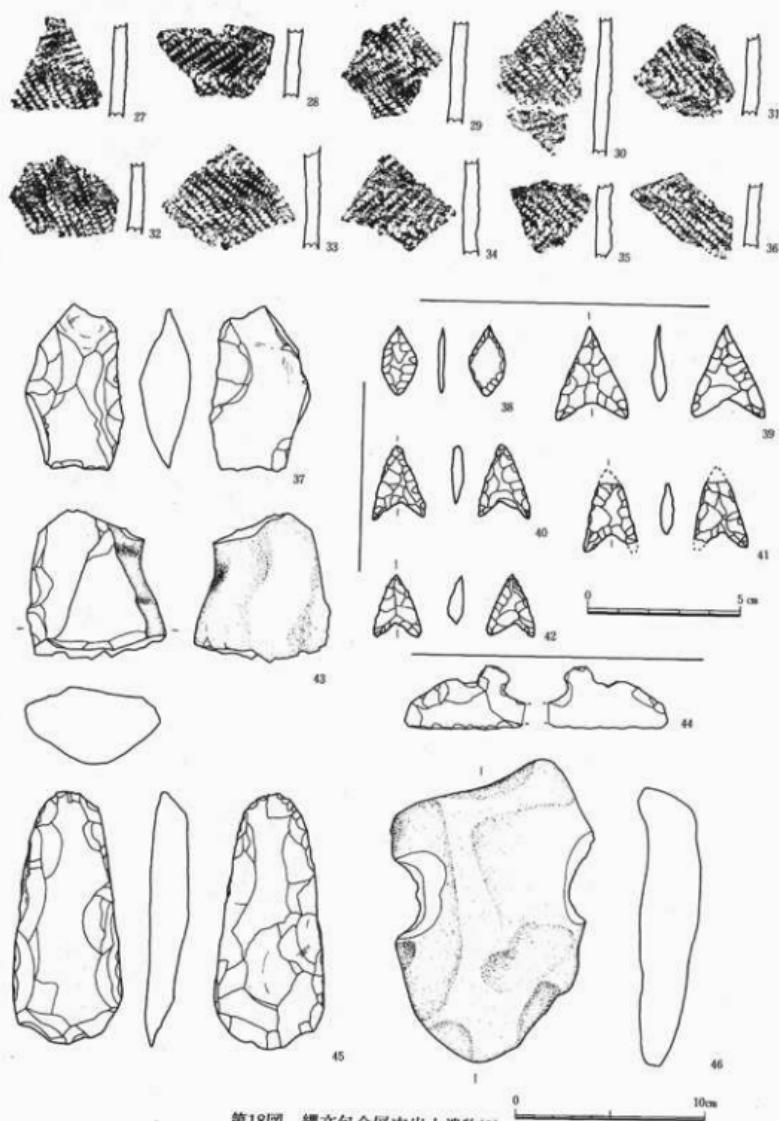
1・2は本土器群の時期を決定する根柢となった口縁部の破片である。口縁は肉厚で複合口縁の様相を呈する。この口縁部だけに三角形の印刻文を上下交互に施文しており、下段の印刻文は複合口縁の下端を押捺るように施文される。口縁部は変化せずにほぼ直立する。口唇はやや内削り気味である。地文には単節RL斜縄文が施文されており、口縁部に及ぶ。斜縄文は羽状を構成することを基本としているようで、その他に3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13で認められる。

石器（第18・19図、図版22）

37. スクレイパー。縱長のもので右側縁に刃部が作り出される。剥離は雜である。長さ8.7cm、幅5cm、厚さ2.7cm。断面三角形。
38. 木葉形尖頭器。長さ2.3cm、幅1.1cm、小形で薄い。調整は周辺部において行なわれる。
39. 凹基無茎鎌。長さ3.1cm、幅2.3cm。幅広の大形品。断面はほぼ平坦。
40. 凹基無茎鎌。長さ2.4cm、幅1.2cm。断面は平坦。

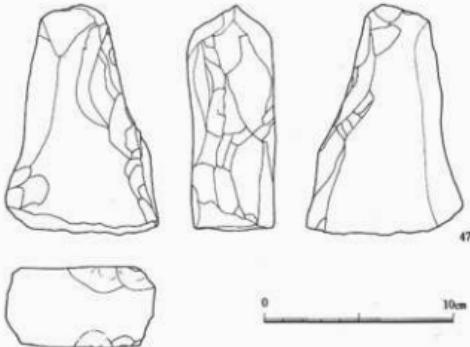


第17図 繩文包含層内出土遺物(1)



第18図 繩文包含層内出土遺物(2)

41. 凹基無茎鎌。先端部と片側脚部を欠損。現存部で長さ2.3cm、幅2.4cm。断面は平坦。
42. 凹基無茎鎌。長さ2.1cm、幅1.6cm。断面三角形。
43. スタンプ形石器。右側縁及び片面に自然面を残す。剥離は左側面より行う。上部を欠損するが形態は47と同じと思われる。現存する長さ8cm、最大幅7cm、厚さ3.9cm。
44. 横形石匙。片面加工による刃部の作り出し。一部欠損。調整は雑である。
45. 打製石斧。基部を欠損。両面加工。特に側縁、刃部を調整。刃部の最大幅5.7cm、厚さはなく扁平。
46. 打製石斧。側縁に抉入部を有する大形の分銅形。厚さ3.1cm、長さ15cm。基部に比べ刃部の幅は狭い。側縁、刃部への加工はほとんどない。両面に自然面を残す。抉入部の調整は雑である。
47. スタンプ形石器。自然石を素材、片面に自然面を残す。剥離は右側面より行う。形態は二等辺三角形を呈する。下部面は周辺から剥離。長さ12cm、最大幅8cm、厚さ4.4cm。



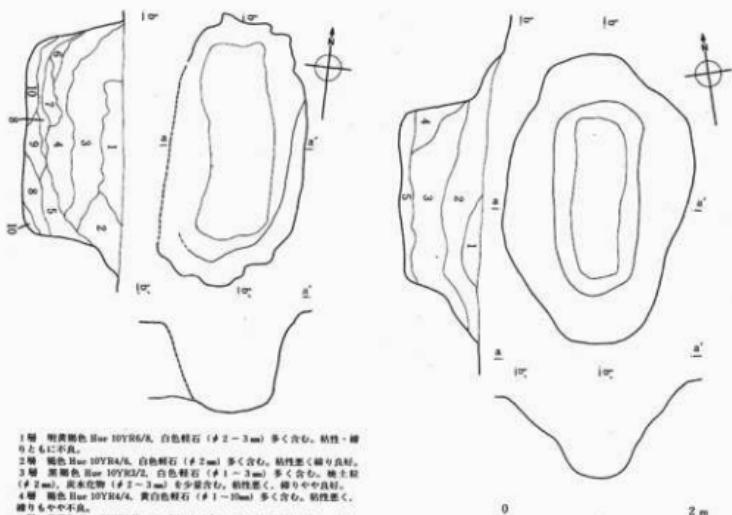
第19図 繩文包含層内出土遺物(3)

土塁

土塁が2基検出された。確認された土塁は2基であるが、付近にはこの他にも存在した可能性が大きい。

1号土塁 (第20図、図版8-3・4)

本跡は調査区域の北東側であるX=77、Y=65-66に位置する。確認面はハードローム層である。平面形は不整な長方形である。規模は長軸（上端2.85m、下端2.10m）短軸（上端1.45m・下端0.70m）、深さ1.10mを測り、長軸方向はN-8°-Wを指す。底部近くに至って垂直気味に掘り込まれ、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。



1号 地表褐色 Hor 10YR6/8、白色輕石（#2-3mm）多く含む。粘性・被りともやや不良。
2号 黑褐色 Hor 10YR4/2、白色輕石（#2mm）多く含む。粘性悪く被り良好。
3号 黑褐色 Hor 10YR2/2、白色輕石（#2-3mm）多く含む。被り良好。
4号 黑褐色 Hor 10YR4/4、黃白色輕石（#2-3mm）を少許含む。粘性悪く被りやや良好。
5号 黑褐色 Hor 10YR5/6、白色輕石（#2-3mm）多く含む。粘性悪く被りもやや不良。
6号 黑褐色 Hor 10YR5/6、Black Block (#5-10mm) 20cm程（#1mm粒）をかなり含む。被りやや良。被り良好。
6号 黑褐色 Hor 10YR5/6、10cm程（中1cm）を少量含む。粘性悪く被り不良。
7号 黑褐色 Hor 10YR5/6、ローム粒、ローム塊（#0.5-2cm）多く含む。被りやや不良。被りやや不良。
8号 黑褐色 Hor 10YR4/4、ローム粒を多く含む。粘性やや良好。被り不良。
9号 黑褐色 Hor 10YR5/6、ローム粒を多く含む。粘性やや良好。被り不良。
10号 黑褐色 Hor 6/6、ローム粒（#2-4mm）。ローム粒を多く含む。粘性やや良好。被り不良。

1. 黄褐色、7SYR5/8、白色輕石（#2mm）若干含む。被り、粘性ともにやや不良。
2. 黑褐色、7SYR5/4、表面に黒褐色土を含む。粘性悪く。被り良。白色輕石若干（#1mm）
3. 黑褐色、7SYR5/2、被りに黒褐色土を含む。粘性悪く。被り良。白色輕石若干（#1mm）。被り良好（#2mm）。炭化物若干（#1mm）
4. 黑褐色、7SYR4/4、ローム粒。ローム塊（#2mm）多。粘性やや良好。被りやや不良。
5. 仁立式黑褐色、7SYR5/4、ローム粒少。粘性たいへん良。被りやや不良。

第20図 1・2号土壌

2号土壌（第20図、図版8-5-6）

本址は調査区域の北東側であるX=74、Y=65-66に位置する。確認面はハードローム層である。平面形は若干隅丸な長方形である。規模は長軸（上端3.15m・下端1.80m）、短軸（上端1.94m・下端0.55m）、深さ1.15mを測り、長軸方向はN-6°-Eを指す。底部近くに至って垂直気味に掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

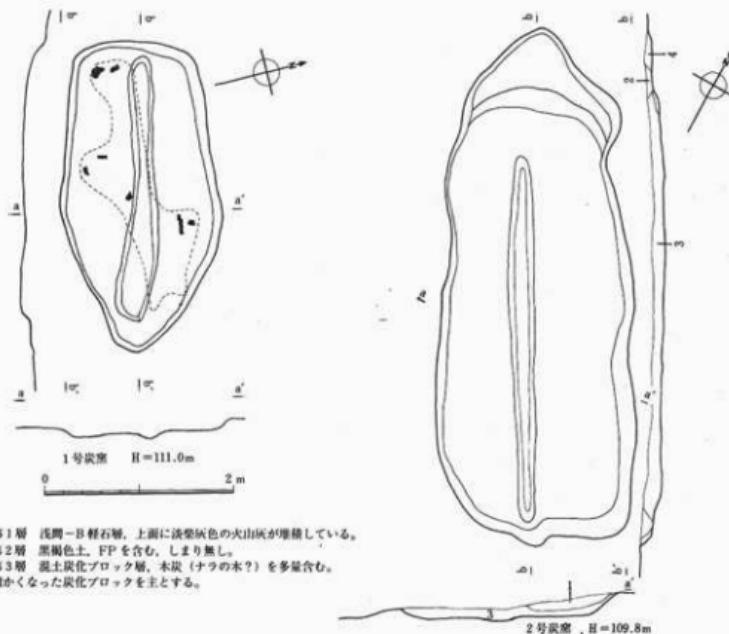
炭窯

炭窯が2基検出された。いずれも覆土上層に浅間B輕石純層が見られる。

1号炭窯（第21図、図版9-1）

本址は調査区域の南西側平坦面であるX=68・Y=86に位置する。平面形は若干方形に近い長楕円形である。規模は長軸3.20m、短軸1.70m、深さ15cmを測り、長軸方向はN-70°-Wを指す。断面は皿状を呈し、底面には小さな窪みが多数見られる。また、底部中央には長軸方向に沿った深さ7cm程の浅い溝が通る。

細かな炭化材と炭化粒が底面から検出された。



第21図 1. 2号炭窯

第1層 浅間一B軽石層。上面に淡墨灰色の火山灰が堆積している。

第2層 黒褐色土。FPを含む。しまり無し。

第3層 混土炭化ブロック層。木炭（ナラの木？）を多量含む。

細かくなつた炭化ブロックを主とする。

覆土上層に浅間B軽石純層が見られ、遺物は出土しなかつたが、時期的には平安時代末期に属するものと考えられる。

2号炭窯（第21図、図版9-2）

本址は調査区域の南東側緩斜面であるX=77・Y95に跨がって位置する。平面形は若干方形に近い長椭円形である。規模は長軸5.50m、短軸2.05m、深さ7~20cmを測り、長軸方向はN-28°-Wを指す。断面は皿状を呈し、底面には小さな窪みが多数見られる。また、底部中央には長軸方向に沿った深さ5cm程の浅溝が通る。

細かな炭化材と炭化粒が、覆土中と底面から多量に検出された。

覆土上層に浅間B軽石純層が見られ、遺物は出土しなかつたが、時期的には平安時代末期に属するものと考えられる。

古墳

今回の調査で発掘された古墳は2～4号墳の3基であるが、この他に本遺跡では4号墳の北東に接して1号墳が存在する。1号墳は昭和58年度に県教育委員会により調査が行なわれたが、今回の調査区内には遺構が延びていないことが明らかとなり、本報告においては2～4号墳について記す。

2号墳（第22～25図、図版10-1・2、11-1・3、12-1・2）

本古墳は、第5地点の調査区内北西部に位置する。古墳北半部は昭和58年度に群馬県教育委員会により発掘調査がなされ、今回は、その残りの南部を調査しているため、両調査の成果を合わせて報告する。

墳丘はすでに消失しており、平坦となっているが、周溝の形状より径約18mの円墳と推定される。同溝は北端が切れた块状を成している。最深部は30cmでかなり浅く、最大幅4mである。

前庭は東西9.3m、南北5.5mの不整三角形を呈しており、石室開口部に接する部分には石積みが認められる。

内部主体は、河原石の乱石積みの横穴式石室である。石室はかなり激しく破壊されており、天井石はすでに消失しており、側壁は特に中央部が著しく、根石も除去されている。このため、袖部の状態は不明である。また、石室の破壊された時期は3・4号古墳同様に石材が前庭部覆土より多量に出土し、浅間山B軽石下となっているため、平安時代以前と考えられる。

玄室は中央部が破壊されているため形状不明である。床面には敷石が認められる。側壁は西壁が根石の一部を残すのみであるが、東壁は一部に4～5段の石積みが確認される。奥壁は中央部かなり大形の石を置き、その外周はやや小形の石を置いて構築されている。

羨道は玄門から羨門に向いせまくなってしまっており、側壁は羨門部分を除き、根石のみである。床面は多量の礫が敷かれており、羨門部にやや大きめの石を置いている。

石室の構築状況は地山をハードローム層上面まで掘り下げて掘形とし、さらにこの掘形底面に根石を置いている。裏込はローム、黒色土である。

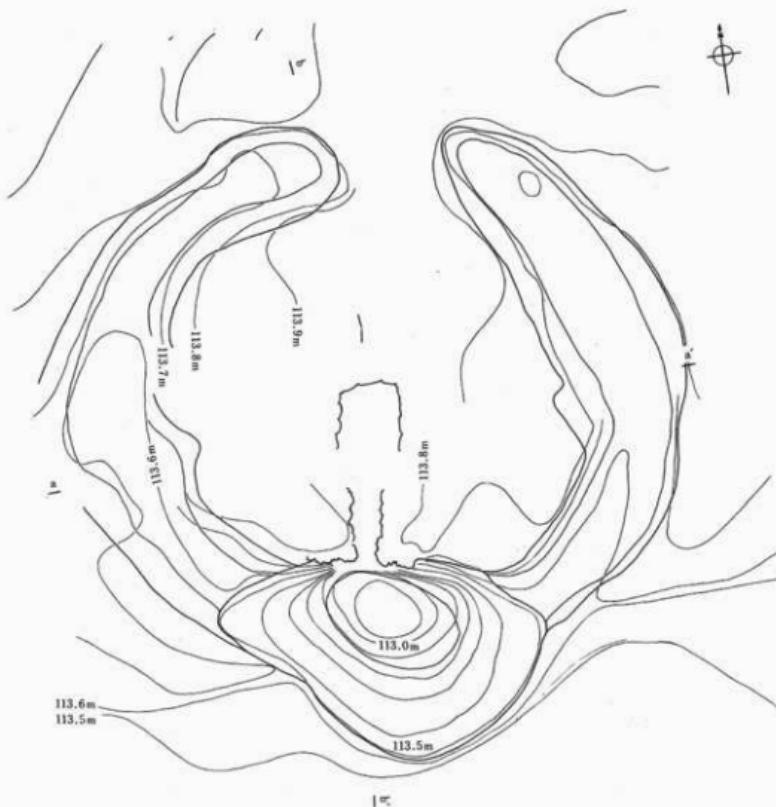
遺物は石室内より出土せず、前底部覆土より須恵器片1点、土師器20点、磨製石錐1点が出土している。

遺物

1、土師器壺。体部内縁気味に立ち上がり、口縁部外反気味に短く直立する。口縁部内外面横ナデ。体部外面施削り。内面ナデ。胎土に軽石？を含む。焼成は不良。色調は橙褐色。残存は $\frac{1}{2}$ 。

2、須恵器壺。球状を呈すると思われる胴部より口縁部短く直立する。口縁端部平坦。内外面回転横ナデ。胎土は石英、黒色鉱物粒を含む。焼成は堅緻。色調は灰褐色。口縁部～肩部破片 $\frac{1}{2}$ の残存。自然釉外面付着。

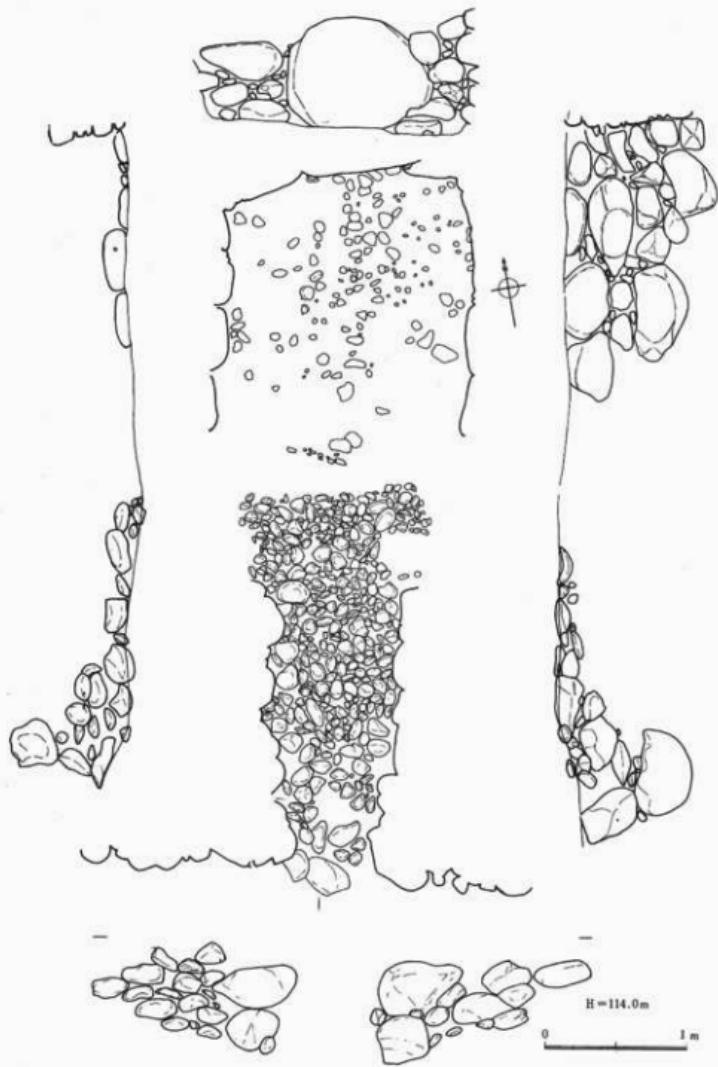
3、磨製石錐。2号墳前底部出土。両脚部欠損。現存部で長さ3.8cm、幅2.2cm。断面は扁平。基部の中央に直径3mmの穴があけられている。両面ともによく研磨されている。



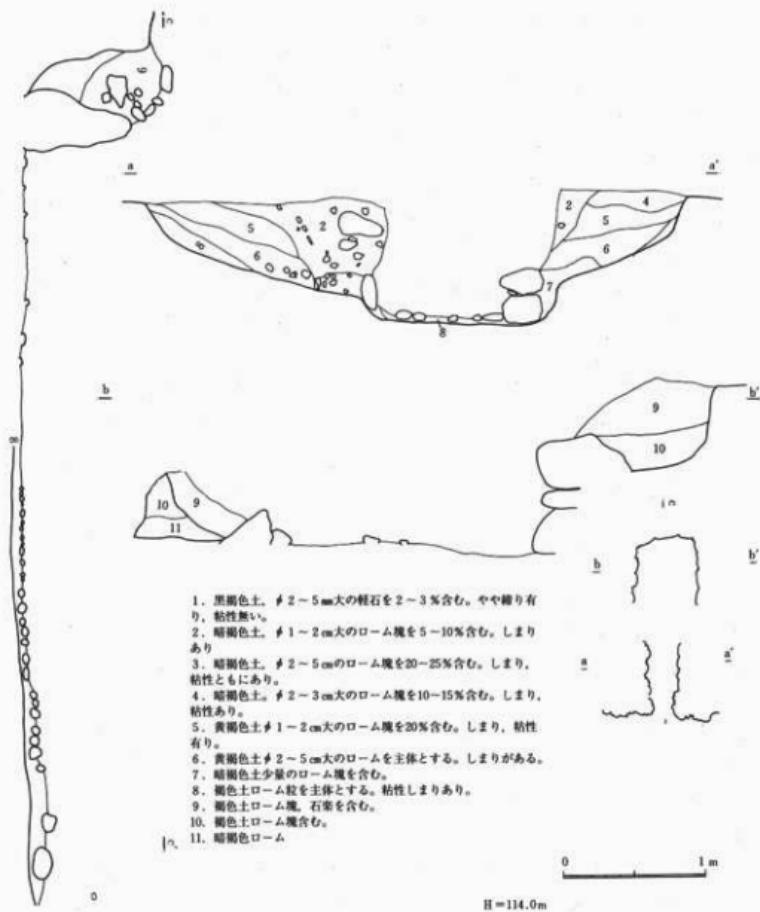
1. 表土
2. 黄褐色土, ローム, B軽石含む
3. B軽石純層
4. 黒色土, B軽石含む
5. 棕褐色土, ローム含む
6. 黑色土, C軽石
7. 棕褐色土, C軽石, ローム含む
8. 棕褐色土, ローム少量含む
9. 暗褐色土
10. 黄褐色ローム

H = 114.0m
0 4 m

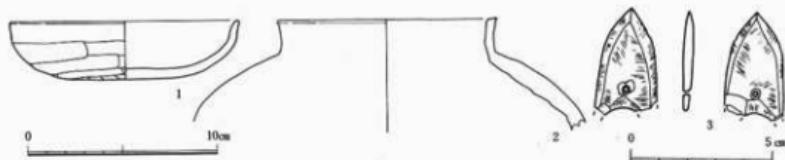
第22図 2号古墳全体図



第23図 2号古墳石室



第24図 2号古墳石室掘形断面図



第25図 2号古墳出土遺物

3号墳（第26図～30図、図版13-1、14-1・2、15-1、17-2）

本古墳は第5地点の調査区中央部に位置し、周辺はやや南東に傾斜した斜面となっている。また、本古墳北方に1・4号墳が、北西に2号墳がそれぞれ存在している。

墳丘はすでに消失しており、平坦となっているが、周溝より径約13mの円墳であったと推定される。周溝は東部と北西部の一部が確認されたにすぎず、深さも最深部15cmと極めて浅く、標準土層第Ⅲ層を底面としている。

前庭は東西5.2m、南北4.0mの楕円形に地山をハードローム上面まで掘り下げて構築しており、さらに石室開口面の左右に河原石を積み上げ壁面としている。

内部主体は河原石の乱石積みの両袖形横穴式石室である。横穴石室はすでに天井部及び壁上部が消失されており、この消失時期は前庭部覆土より多量の石材が出土し、その上部に浅間山B軽石が存在することから平安時代以前と推定される。

玄室は奥壁がやや広がる逆台形を呈し、また、玄門は柱状の石材により構成されている。床面には礫を全面に敷きつめているが、玄門に近い部分にやや大きめの石を、その他の部分に小さめの石を敷く傾向が認められ、さらに玄門に接する石は樋石状となる。側壁は3～4段が残存しており、やや持ち送り状となっている。また、奥壁より3段程度のところで両側壁の3段目の石が壁面より突出しており、あたかもこれにより玄室内の空間を仕切り分けているかのような状況が見られる。奥壁は複数の石材により構成されている。

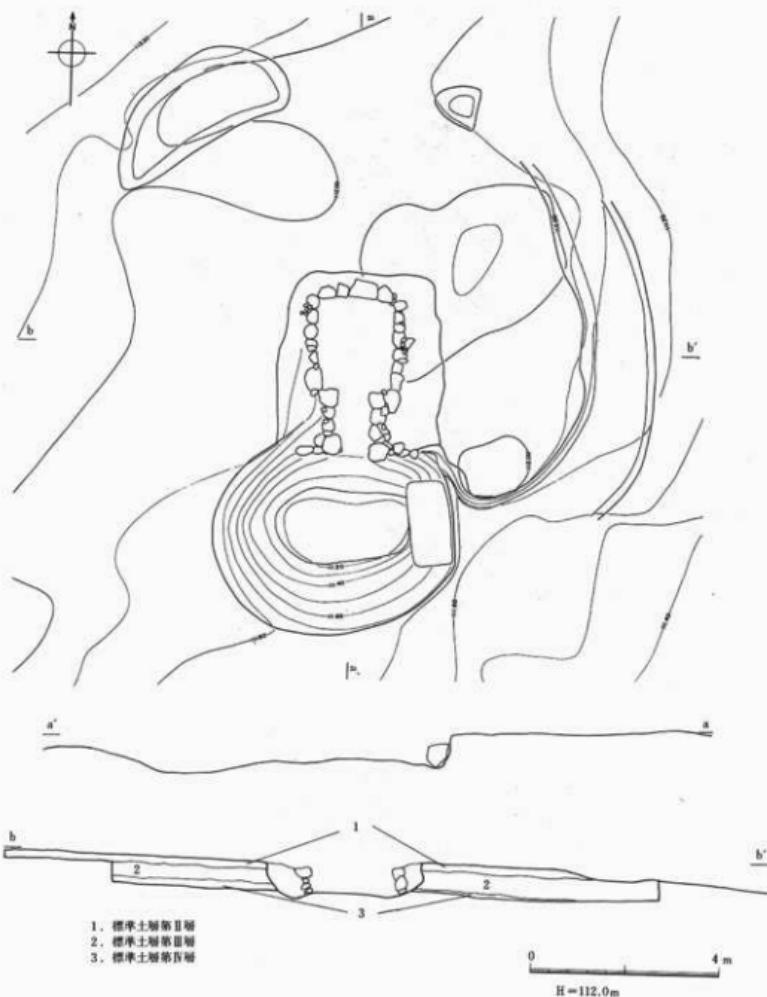
羨門は玄門より羨門に向って幅がやや広がる傾向が認められており、閉塞の礫が残存していた。床面は玄室同様に多量の礫が敷きつめられており、羨門部にやや大きめの石を置いている。側壁は3～4段が残存しており、羨門に大きな石材を立て、その他はやや小形の石により構成される。

石室の構築状況はハードローム層上面まで掘り下げて掘り方とし、さらにこの掘り方の底面外周部を溝状に浅く掘り下げ、そこに根石を置いている。側壁の裏込はローム及び黒色土である。

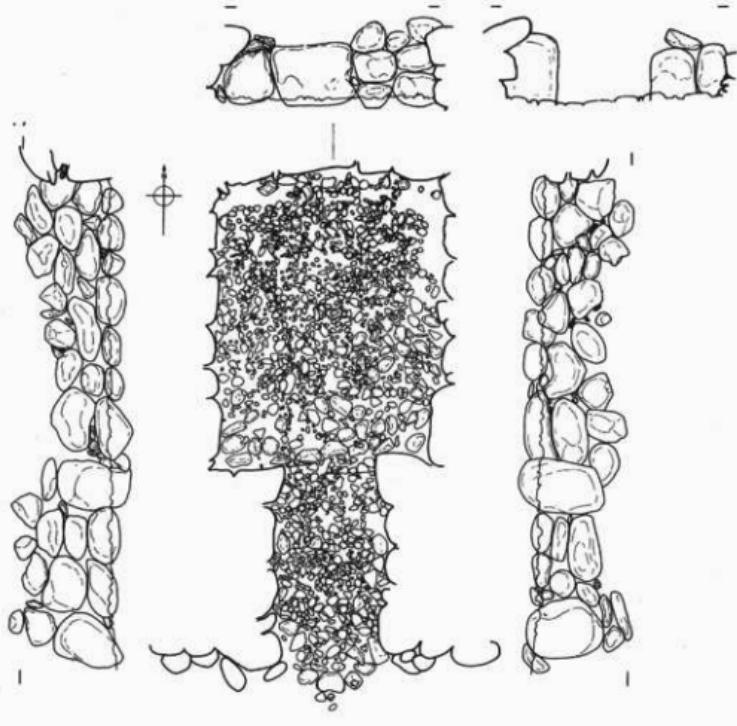
遺物は石室内より全く出土せず、前庭覆土より須恵器壺が1点出土している。この須恵器壺は石室が破壊された時期のものと考えられる。

遺物

1、須恵器壺。体部内気味に外傾する。底部回転糸切り無調整。胎土は砂粒を含む。焼成は良好。色調は灰褐色。少残存。

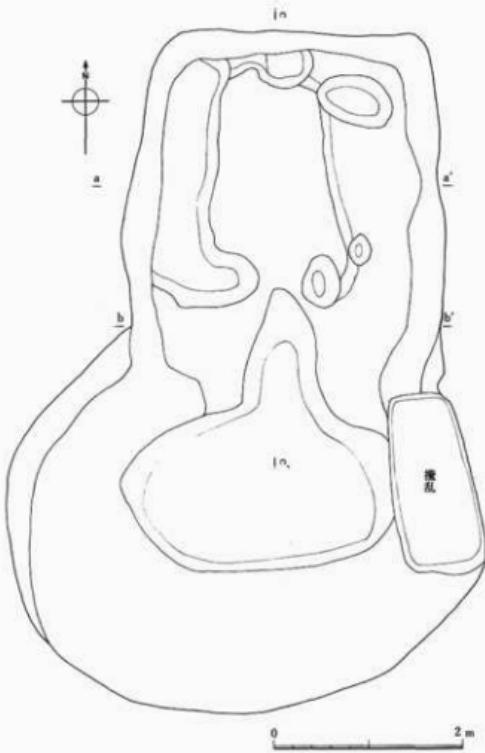


第26図 3号古墳 全体図

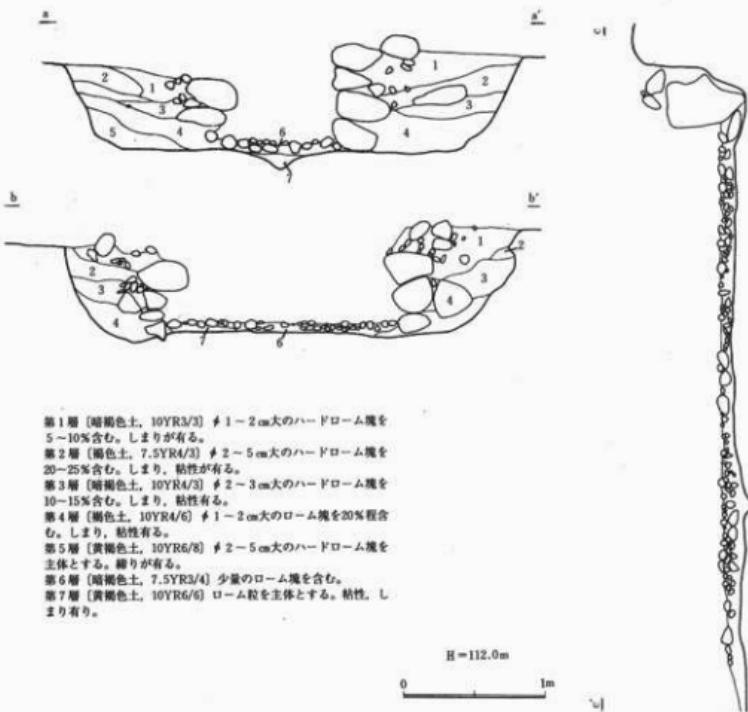


H = 112.0 m 0 1 m

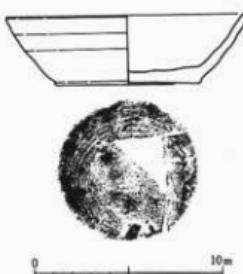
第27図 3号古墳石室



第28圖 3号古墳掘形



第29図 3号古墳石室掘り方断面図



第30図 3号古墳出土遺物

4号墳（第31～35図、図版18-1・2、19-1・2、20-1・2）

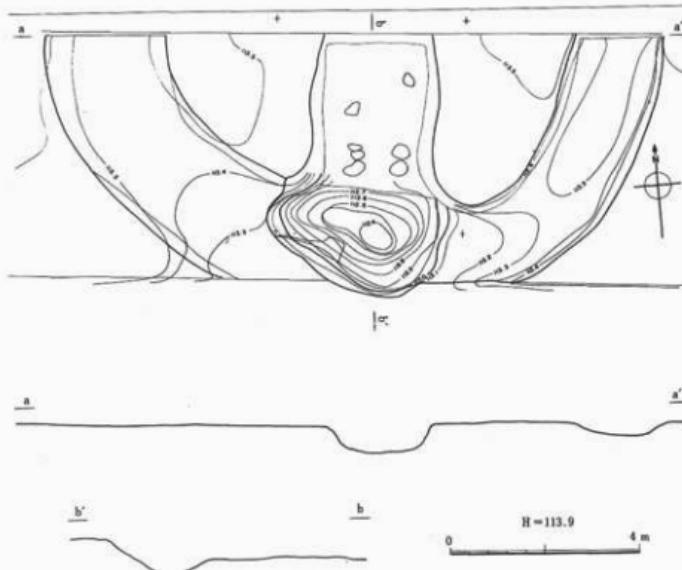
本古墳は、第5地点の調査区北端に位置し、古墳北部は未調査区に広がる。北東に接して1号墳が東方に2号墳が、南方に3号墳がそれぞれ存在する。

墳丘はすでに消失しており、平坦となっているが、周溝の形状より推定して径約13mの円墳と思われる。周溝は南半分のみ調査され、北半分は未調査区に広がるため不明である。最深部で30cm、幅約2.5mである。底面は標準土層第Ⅲ層中に構築されている。

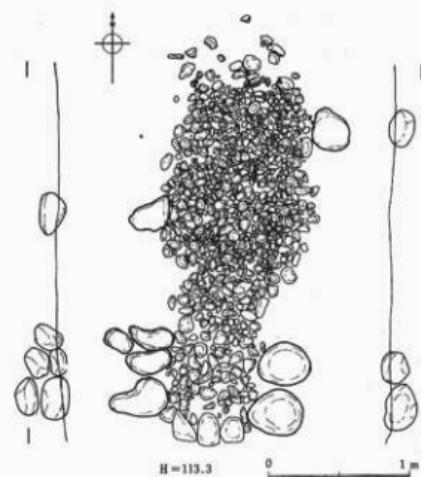
前庭は東西3.8m、南北2.2mの不整三角形を呈し、地山をハードローム層上面まで掘り下げている。

内部主体は河原石の乱石積みの横穴式石室である。横穴石室は側壁の根石一部と床面の敷石の一部が残存するのみで、著しく破壊されている。石室の破壊された時期は2・3号墳同様に前庭部覆土中に存在した多量の石材が浅間山B軽石下にあることから平安時代以前と考えられる。

玄室・羨道等は側壁がほとんど除去されているため、詳細は不明であるが、床面の敷石の状況から両袖形と推定される。また、羨門の床面にはやや大きな石を並べている。



第31図 4号古墳全体図



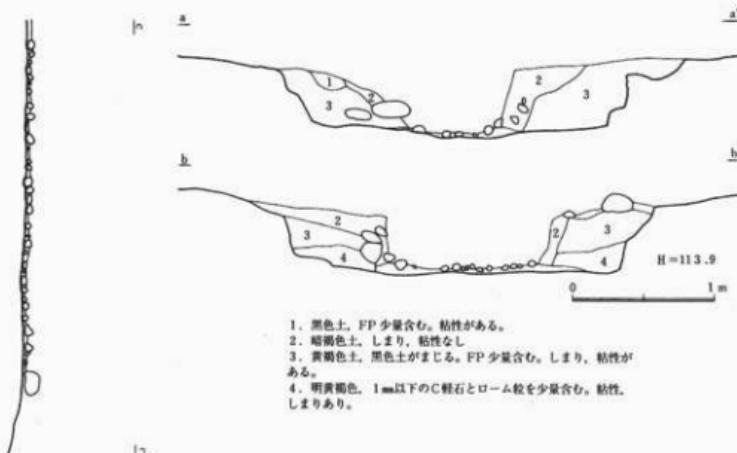
第32図 4号古墳石室

石室の構造状況は地山をハドローム層上面まで掘り下げ掘り方とし、その底面に根石を置いている。裏込はローム及び黒色土である。

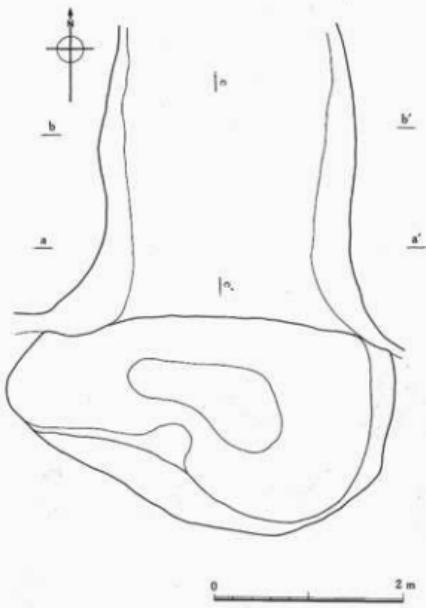
遺物は石室内より全く出土せず、前庭部より須恵器片が1点出土している。

遺物

1、須恵器。口縁部外反気味に立ち上がる。内外面回転横ナデ。黑色鉱物粒含む。焼成は堅緻。色調は灰褐色。口頭部破片^{1/2}残存。

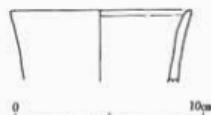


第33図 4号古墳石室断面図



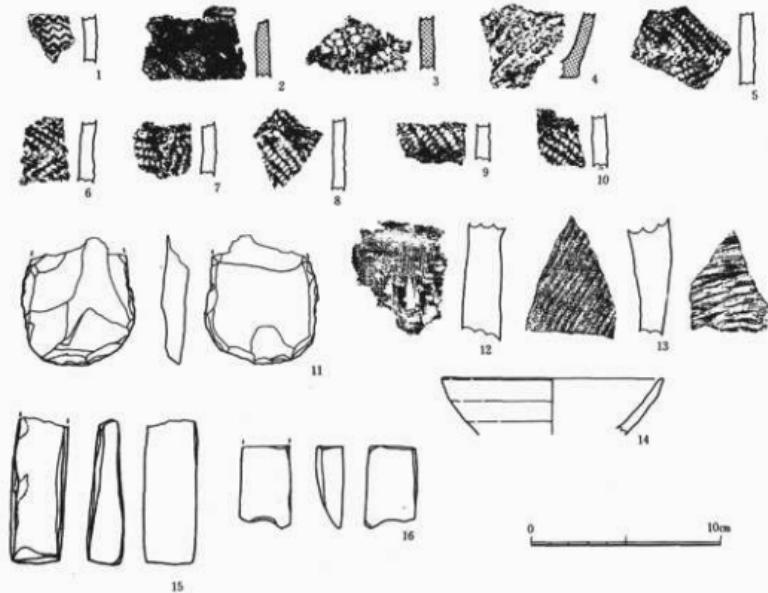
第34図 4号古墳掘形

表探遺物（第36図、図版23-2）



第35図 4号古墳の遺物

1は創草期山形押型文土器。山形文を横位に廻転押捺。山形文は低く、さほど密に押捺されない。器壁は薄く、胎土中に小石を多く含む。焼成は良い。この山形押型文土器が該期のどの型式に伴うものかは不明。2~4は胎土中に纖維を含有する一群である。2は口縁部、口縁は直口する。口唇はほぼ平坦。胎土中に含まれる纖維は少ない。胎土中には小石、雲母も含有される。器面にはR L斜繩文が施文される。3は粗いL R斜繩文が施文される。胎土中には纖維のほか小石が含まれる。4は底部（平底）、器面は粗雑でL R斜繩文が施文される。胎土中には纖維のほか小石が含まれる。3・4は前前期黒浜式か？5~10は胎土中に金雲母を含有する一群である。5~7はR LとL Rの羽状繩文が施文される。胎土中には金雲母のほかに小石を多く含む。8~10はR L斜繩文、胎土中に小石、金雲母を含有し、羽繩文を構成する一群は1丘出土の一群と類縁性が認められる。11は打製石斧。短冊形。両面加工。12は埴輪片。13は須恵器壺片。14は須恵器壺。胎土は石英粒、雲母片含み、焼成は良好。色調は褐色。口縁部破片。残存は%。15・16は砥石。



第36図 調査区内出土遺物

第6章 柳久保水田址遺跡

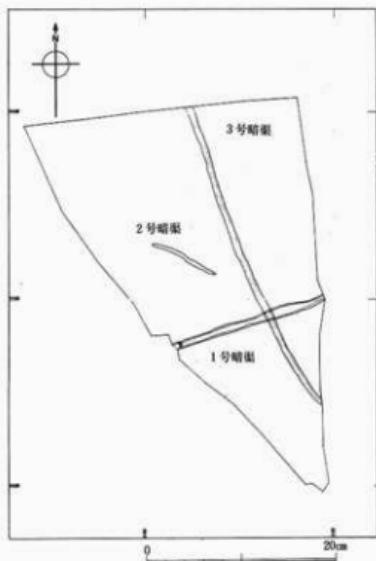
第1節 遺跡の立地

本遺跡は柳久保遺跡と諏訪遺跡の所在する台地に狭まれた開析谷上に位置する。この開析谷は北西から南東にかけて通り、中鶴谷から延びた開析谷と下鶴谷付近で合流する。標高107.0mから110.0mで、柳久保遺跡との比高は約3mである。尚、本遺跡は最近まで水田として利用されていた。

第2節 調査の経過

本遺跡は第6地点、第8地点の2地点に分けて調査した。

第6遺跡は昭和60年4月27日に表土剥ぎを行ない、水が湧くために引くのを待って5月10日に調査を行なった。しかし、水田址は検出できなかった。

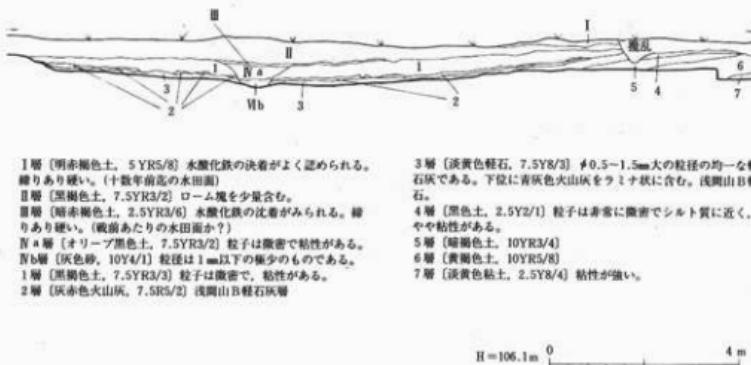


第37図 柳久保水田址遺跡（第8地点）全体図

第8遺跡は昭和60年7月18日から24日まで表土剥ぎを行なったが、水が湧き、そのうえに排土場所が遠いために排土作業は困難を極めた。排土作業が終了した後、排水ポンプを2台設置して調査を開始した。現代の水田址2面と暗渠が3条検出され、実測と写真撮影の後、浅間山B軽石純層の除去作業を開始した。しかし、浅間山B軽石純層下の水田址は検出されなかった。

第3節 土 層（第38図）

本遺跡の土層断面図は調査区北側セクションを実測した。I層とIII層は水田の床土で、上面には水酸化鉄の沈着がよく認められる。いずれも昭和に入ってからの水田面と思われる。IVa層とIVb層は3号暗渠内の土層である。2層と3層は浅間山B軽石純層である。



第38図 柳久保水田址遺跡（第8地点）北壁断面図

第4節 遺構（第37図、図版24-2）

水田址の調査を行なったが、浅間山B軽石純層下の水田址は検出されなかった。今回検出された水田址はⅠ層上面とⅢ層上面の2面あり、地元の方々の話からいざれも昭和に入ってから作られたものとわかった。

1号暗渠は北西から南東へ流れる小川に繼がるもので、断面はU字形である。上端幅が80~105cm、下端幅が40~60cm、深さが20~32cmである。覆土には砂と杉の枯枝が混入されており、小川との合流部分には人頭大の河原石4箇が積み上げられている。Ⅰ層上面に伴う暗渠である。

2号暗渠は1号と同じく、覆土に砂と枯枝が混入されていた。断面形は皿形で、上端幅が30~45cm、下端幅が約20cm、深さが6~11cmである。Ⅰ層上面に伴う暗渠である。

3号暗渠は谷の最深部に沿うように掘られている。断面形は逆台形に近く上端幅が80~145cm、下端幅が約60cm、深さがⅢ層上面から約35~50cmである。覆土は2層から成り、下層は灰砂、上層は粒子が微密で粘性のある黑色土となる。Ⅲ層上面に伴う暗渠である。

1~3号暗渠はいずれも現代のものである。

第7章 小 結

第1節 土塙・溝

土塙は柳久保遺跡で2基、諏訪遺跡で1基検出された。いずれも年代を示す遺物が出土していないため、土塙内に堆積した覆土より年代を想定する。

本遺跡では縄文時代の造構覆土に2つの類型が見られる。第一に、縄文時代の遺物を包含する褐色土（標準土層第Ⅲ層）を覆土とする例。第二に、褐色土（標準土層第Ⅲ層）が確認面までは覆うが、造構内には堆積せず、黒褐色土が堆積する例。前者は柳久保遺跡試掘調査時において頭無遺跡より縄文時代前期の土器を伴う土塙の覆土と同じであり、これをもってするならば前期以後の造構覆土の可能性をもつと思われる。後者は前期遺物包含層である褐色土（標準土層第Ⅲ層）下に存在することから、それ以前と考えられる。この点より柳久保遺跡1・2号土塙は前期以前、特に早期の所産である可能性が大きい。諏訪遺跡1号土塙は柳久保遺跡1・2号土塙と形態的に一致することより同一時期と思われる。

溝は諏訪遺跡の第1地点と第9地点に計4条検出されている。

第1地点の溝3条はいずれも調査区域外まで長く延び、特に3号溝は「荒砥北部遺跡群発掘調査概報」で報告された1号溝と接合する可能性が高い。また、他に4条の溝が報告されており、今回調査した1・2号溝も接合できると考えられる。いずれも覆土上層に浅間山B軽石純層を有するという共通点がある。

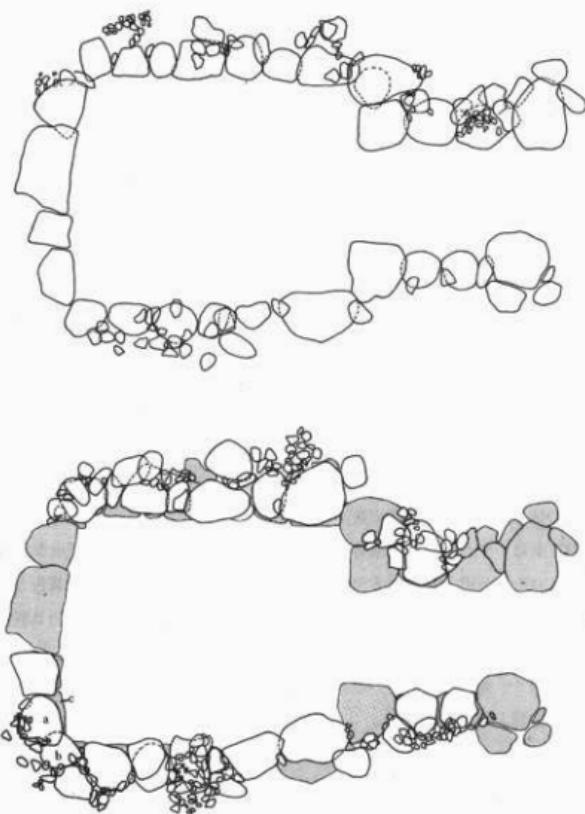
第9地点の溝は浅く、途中で切れているが、覆土中に浅間山B軽石純層が充填されているため、時期的に平安時代末期と考えられる。

第2節 古 墳

構築技術 今回、古墳を調査するに対して、どのような点に着目して発掘を行なうかを調査員一同で協議を行なった。その結果、石室の構築状況について分析検討を加える点にまとまり、本遺跡の中でも比較的保存の良好な3号古墳を選び、石室の解体、個々の石材すべてを実測・調査した。そこで、これらより明らかとなった構築工程、技法上の特色について記す。

石室構築の第一段階は第5章で示めしたように掘形の構築より始まるが、ここでは省略し、石材を積み上げる段階より考えてみたい。

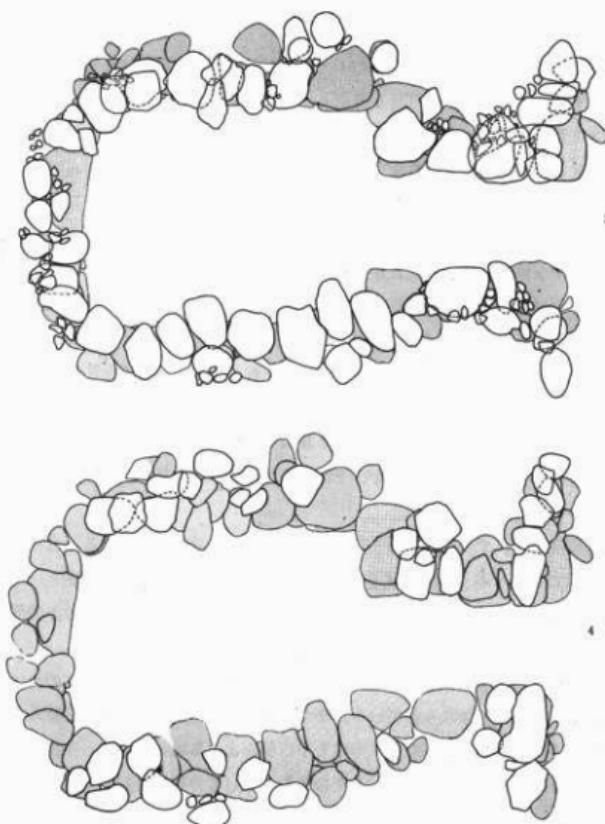
最初に設置された石材は奥壁の中央部および玄門と羨門の石と思われる。これは他の側壁根石が底面に単に置かれているが、それに対して上記の石材はやや深く埋め込まれており、さらに周辺に接する石材が奥壁中央部石材等設置後、押し込まれているような状況を発掘時には感じられ



第39図 3号古墳石室分解図(1)

た。

この後の石材積み上げ方法であるが、玄室北西隅の2段目の石材（第 図2—a・b・c）を見ると、奥壁の2段目の石材（a）が側壁2段目の石材（b）の上に置かれており、2段目においては奥壁の石材が側壁の石材よりも後に置かれたことになる。また、2段目の側壁の石材（b）は奥壁1段目の石材（c）の上に置かれており、側壁2段目の石材よりも先に置かれたことになる。まとめると、奥壁1段目の石材（c）→側壁2段目の石材（b）→奥壁1段目の石材（a）という順序となり、このことより奥壁あるいは側壁のいずれかの壁を先行させて完成させていないことが明らかである。また、壁は石室全体を1段毎に構築していることが理解できる。



第40図 3号古墳石室分解図(2)

次に各段における石積みの状況について触れる。各段毎の石積み状況は石室分解図（第39・40図）として示した。この分解図は第39図1を1段目とし、第40図4を最終の4段目となっている。

1段目（第39図1） 奥壁中央部、玄門、漢門の各石材を設置後、その他の部位に石材を加えてゆく、この時に各石材の長軸を石室の長軸長に平行させて置く横積みがなされている。この1段目を設置終了後、2段目との設置面を水平あるいは高低の調節をするために小礫等を部分的に配している。

2段目（第39図2） 1段目同様に石材の長軸方向を石室の長軸方向に平行させて置く横積み

がなされている。この2段目を設置終了後、3段目を設置するための調節を蝶等により行なっている。

3段目（第40図3） 3段目は今までの1・2段目と石材の利用方法が異なっている。これまで石材の長軸を石室の長軸に平行させる横積みに対して、石材の短軸を石室の長軸に平行させる小口積みにより構成されている。また、この段より側壁の転びが気持ち強くなる傾向が見られている。3段目を設置終了後、4段目を設置するための調節を蝶等により行なっている。なお、石室開口部前面の前庭部の石積みは小口積みとなっている。

4段目（第40図4） かなり崩壊しているため、石材の利用状況は不明な点が多いが、3段目同様に小口積みが主体を占める可能性が高い。

以上が各段における石材の利用状況であるが、特徴的な点として、1・2段目を横積み、3段目以上を小口積みすることがあげられる。

次に本遺跡3号墳石室構築方法と他の古墳例とを比較してみる。本例と比較的近似したものとして富岡市の上田篠古墳群1号墳が認められる。当古墳の側壁は1段目を平積みとし、玄室については不明だが、羨道部の2段目は小口積みと報告（註1）されている。この場合、小口積みが2段目より行なわれている点は異なるが、下部を横積みにし、上部を小口積みにする意味では良く類似する。

近似する例に対して、やや異なる例として上田篠古墳群4号墳が存在する。当古墳の石室側壁は1段目が立石となっており、残存する2段目が小口積みとされている。（註2）当古墳に類する例として福井県の宿布古墳群4号墳がある。（註3）報告された石室断面および報文から判断する限り、側壁1段目が立石となっており、2段目以上が小口積みと思われる。

このように側壁の石積み方法にも数種の類型が存在することが明らかで、この点に関しては上田篠古墳群の報告でも若干触れられている。また、この他に想定される側壁石積み方法としては全ての段を横積みとする場合、また全ての段を小口積みとする場合がある。今後、これらの側壁石積みの方法の存在の有無および類型化とその要因について分析・検討してみたい。

註1 上田篠古墳群 原田遺跡 1984 富岡市教育委員会

註2 同上

註3 宿布古墳古墳群 1985 福井県教育委員会 財團法人古代學協會

写 真 図 版

図版 1

諏訪遺跡（第1地点）



1. 諏訪遺跡(第1地点)全景(南から望む)



2. 1号溝(南西から望む)

図版 2

諏訪遺跡（第1地点）



1. 2号溝(南から望む)



2. 3号溝(南から望む)

図版 3

諫訪遺跡
(第1地点)



1. 1号溝・断面



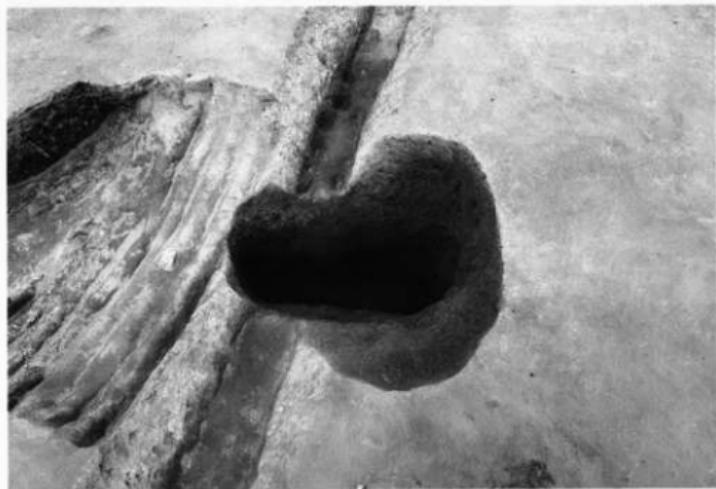
2. 2号溝・断面



3. 3号溝・断面



4. 3号溝・断面



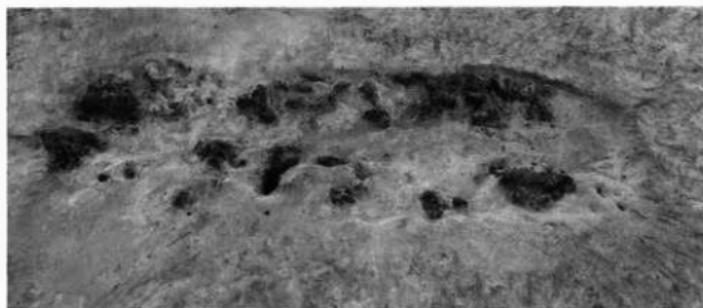
5. 1号土塙

図版 4

諏訪遺跡（第2・3地点）



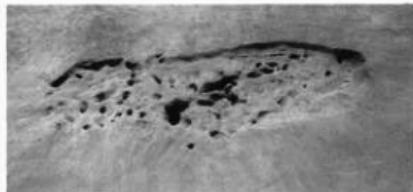
1. 諏訪遺跡(第2・3地点)全景(東から望む)



2. 1号炭窯・炭化材出土状況



3. 1号炭窯・確認状況



4. 1号炭窯・完掘状況



1. 諏訪遺跡(第9地点)全景(南から望む)



2. 諏訪遺跡(第9地点)発掘風景



3. 諏訪遺跡出土遺物

図版 6

柳久保遺跡
(第4・5地点)



1. 柳久保遺跡(第4地点)全景(南東から望む)



2. 柳久保遺跡(第5地点)全景(北から望む)



1. 柳久保遺跡(第7地点)全景(北から望む)



2. 柳久保遺跡(第7地点)縄文時代包含層調査状況(北から望む)



3. X=83, Y=110 グリッド遺物出土状況



4. X=83, Y=104 グリッド遺物出土状況

図版 8

柳久保遺跡
(第5地点)



1. 縄文土器集中区調査状況



2. 旧石器時代・試掘土層断面



3. 1号土塚・断面



4. 1号土塚・完掘状況



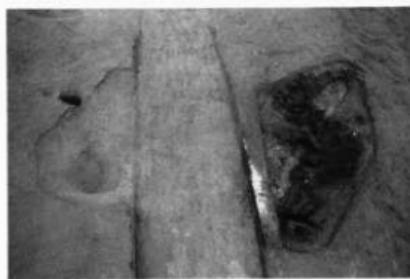
5. 2号土塚・断面



6. 2号土塚・完掘状況



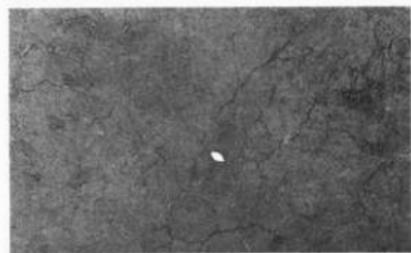
1. 1号炭窯



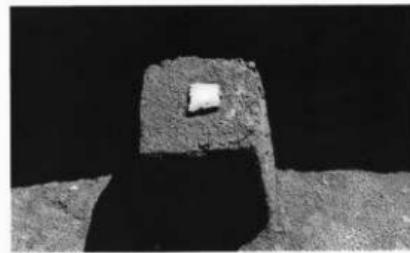
2. 2号炭窯



3. 繩文時代包含層の発掘風景



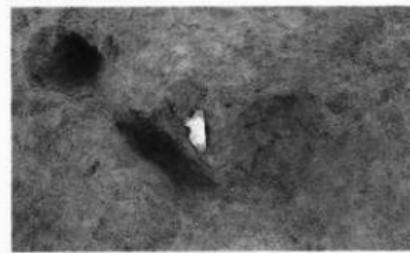
4. 尖頭器出土状況



5. 土器出土状況



6. 石斧出土状況



7. 石匙出土状況

図版10

柳久保遺跡
(第5地点)



1. 2・3・4号墳の位置(南から望む)



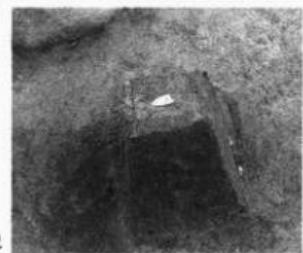
2. 2号墳・周溝確認状況(南から望む)



1. 2号墳・前庭部の石材散乱状況(南から望む)



2. 2号墳・前庭部の石材散乱状況拡大



3. 2号墳・前庭部の磨製石鎌出土状況

図版 12

柳久保遺跡（第5地点）



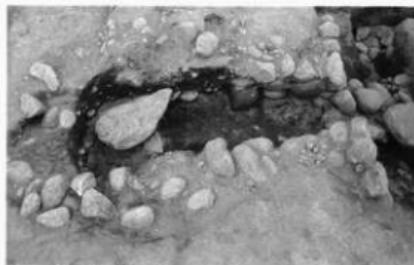
1. 2号墳・石室(南から望む)



2. 2号墳・掘り方(南から望む)



1. 3号墳・周溝確認状況(南から望む)



2. 石室内の落石状況



3. 前庭部実測風景



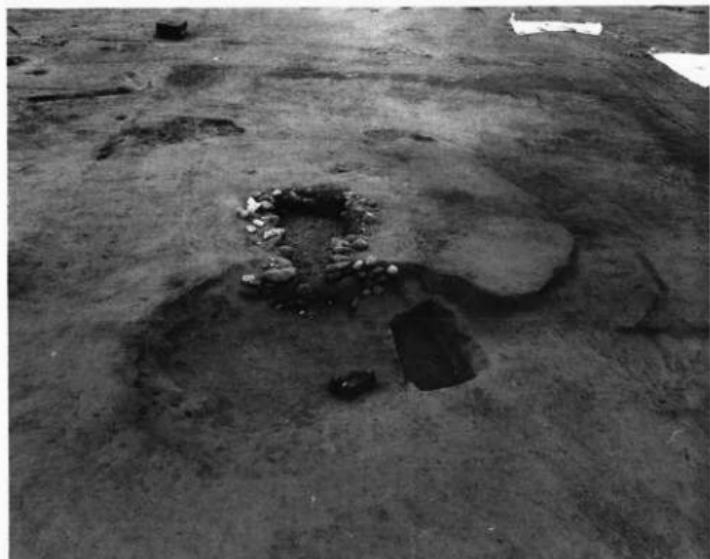
4. 石室内の落石状況



5. 石室発掘風景

図版 14

柳久保遺跡
(第5地点)



1. 3号墳・全景(南から望む)



2. 3号墳・石室閉塞状況(南から望む)



1. 3号墳・石室開口状況(南から望む)



2. 前庭部の須恵器出土状況



3. 石室(北から望む)



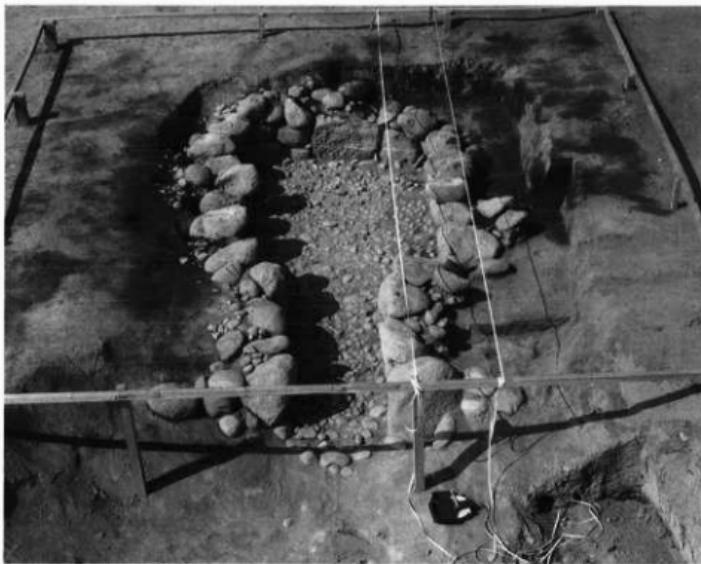
4. 石室(東から望む)



5. 石室(西から望む)

図版 16

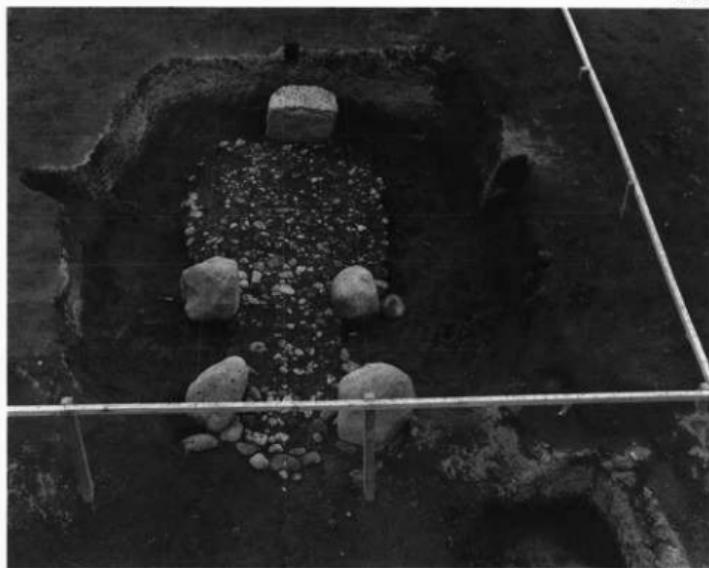
柳久保遺跡
(第5地点)



1. 石室・石積み 3段目(南から望む)



2. 石室・石積み 1段目(南から望む)



1. 漢門と玄門と奥壁の立石状況(南から望む)



2. 3号墳・掘り方全景(南から望む)

図版 18

柳久保遺跡
(第5地点)



1. 4号墳・周溝確認状況(南から望む)



2. 4号墳・前庭部の石材散乱状況(南から望む)



1. 4号墳・前庭部の石材散乱状況拡大



2. 4号墳・石室(南から望む)

図版 20

柳久保遺跡（第5地点）



1. 4号墳・石室石積み1段目(南から望む)



2. 4号墳・掘り方(南から望む)

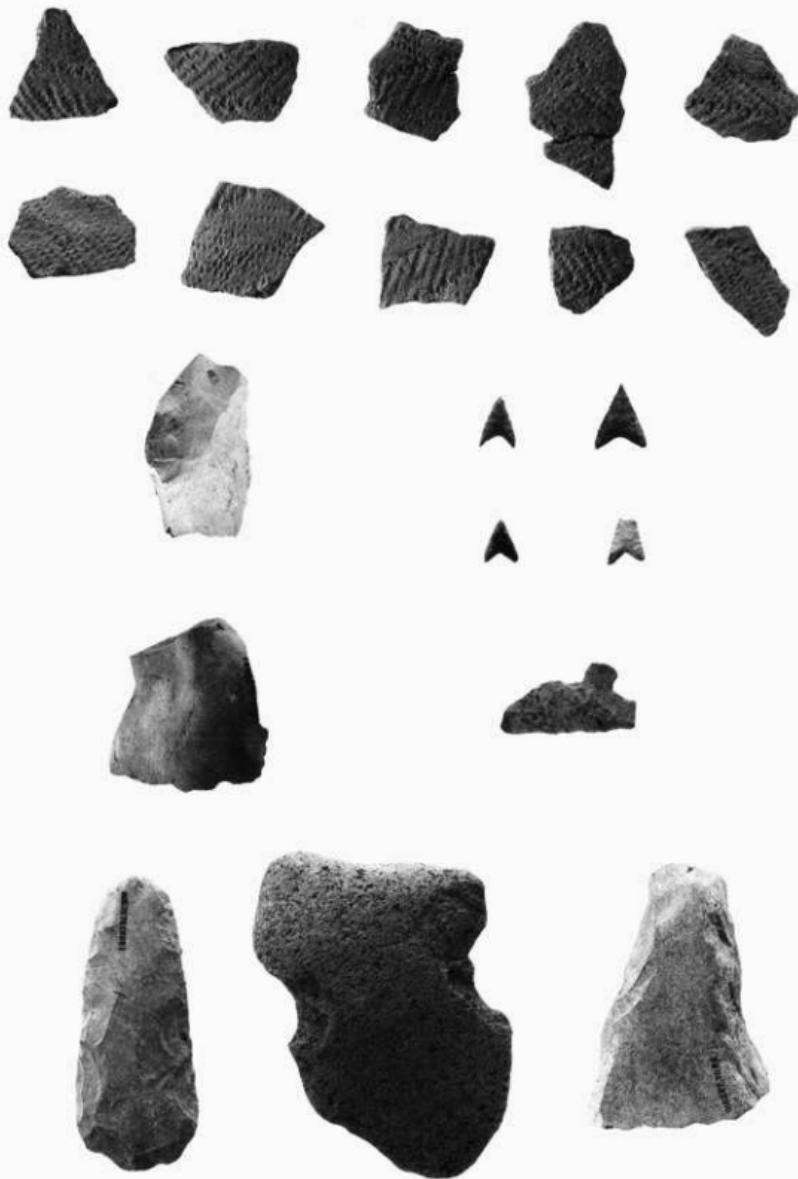
柳久保遺跡



包含屑出土遺物（1）

図版 22

柳久保遺跡



包含層出土遺物（2）



1. 古墳出土遺物



2. 表採遺物

図版 24

柳久保水田址遺跡（第6・8地点）



1. 柳久保水田址遺跡(第6地点)全景(東から望む)



2. 柳久保水田址遺跡(第8地点)全景(南から望む)

柳久保遺跡

印 刷 昭和61年 3月21日

発 行 昭和61年 3月26日

編 集 山武考古学研究所

発行者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市教育委員会

印刷所 横文化総合企画

T E L 0476-24-1563

